12
二葉
小
国421

教育學部
資料室

文部省検定済教科書
新教育実践研究所編

国語の本

小KC
F97

8

四年 下

60138
教科書文庫
6
810
34-1950
01304
49934

寄贈

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449934

広島大学図書
0130449934

国語の本

第四学年

八

下

昭和二十五年月日
文部省検定済
小学校国語科用

廣島大學
教育學部圖書

中央図書館

広島大学図書
0130449934

もくろく

一 秋の日
(一) いねこき……4
(二) 製材所……6
(三) コオロギ……8
二 赤いはね
(一) 愛の心……14
(二) 赤いはね……22
三 むかしの生活
(一) てんらん会へ……40
(二) むかしの家……42
(三) いろいろな木器……51
四 話を買う話……60
五 動物の冬ごもり……75
六 冬の生活

七 (一) 雪のうち……88
(二) 虫めがね……94
(三) まどのガラス……105
ことばのアクセント
(一) 二十と二重……109
(二) ことば集め……114
(三) 学芸会で……117
八 野口英世(ひでよ)
(一) 大やけど……122
(二) てんぼう……126
(三) 働く少年……132
(四) 先生のなさけ……136
(五) 志を立てて……141
学習の手引……145
新しく出たおもなことば……153
新しく出たかん字……159

一　秋の日

（一）いねこき

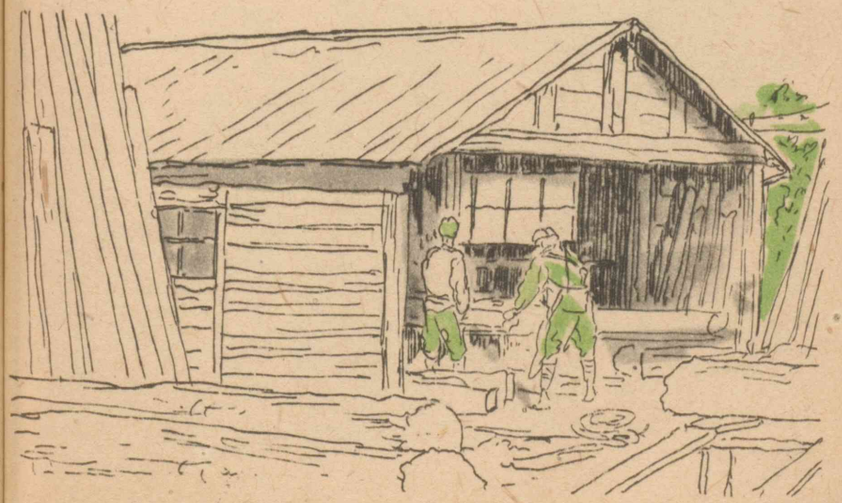
ほい、ほい、ほいといいながら、
にいさんが元気よくいねをこく。
「ぼくもやるよ。」
にいさんとならんで、
ぐいといなたばを機械にかける。
ざざざざざ
もみがとびちる。

ぼくの手まで引っぱられていきそうだ。
強い力でまわるいねこき機械。

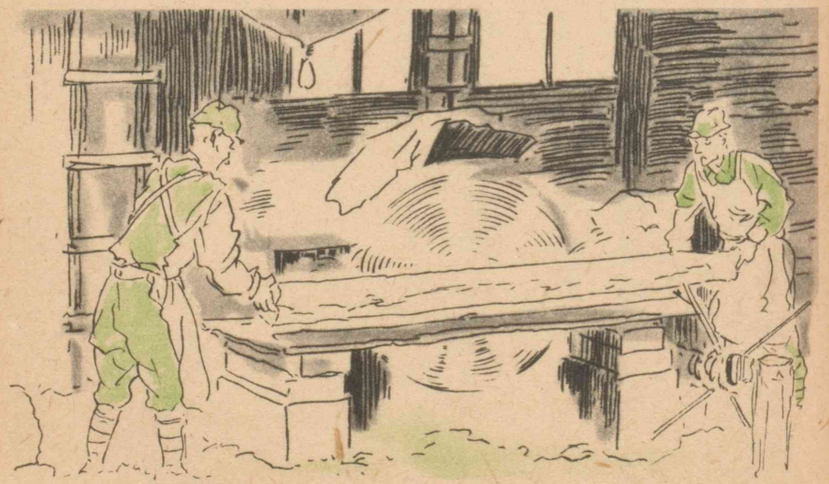
ぼくは「ストップ」といってやめた。
山のようにつまれたわらたばが、
秋の日にてらされている。
「どれ、ひと休みしようか。」
にいさんはわらたばの上に、
どっかりとこしをおろした。
青い青い空、
赤とんぼがすいすいとんでいる。

（二）製材所

まるい大きなのこぎりが、
ゴオン、ゴオンとうなっている。
モーターのそばは、
地ひびきがしている。
その横に太いまるたがつんである。
むこうがわのおじいさんが、
なにか大声でいった。
モーターの音でよく聞えない。



はらがけをしたおじいさんが、
力こぶを出して
大きな木をおしていく。
ジャーンと木の切れる音がして、
のこくずが雨のようにとびちる。
ひきわられた木は、
つぎつぎにつみあげられて、
あたりは木のにおいでいっぱいだ。



（三）コオロギ

秋風がふくたびに、庭のコスモスやはげいとうが、かすかにゆれます。

「コロコロ、コロコロ……。」

「リリリリ……、リリリリ……。」

花だんの横のつみごえの中から、コオロギの声が聞えてきます。

「にいさん、コオロギが鳴いているわ。つかまえて、かってみましょうよ。」

「そうだ。ぼくのへやからびんを持っておいでよ。」

みよ子さんは、いそいで広口びんを持ってきました。

「ほら、一ぴきつかまえたよ。大きなコオロギだ。」

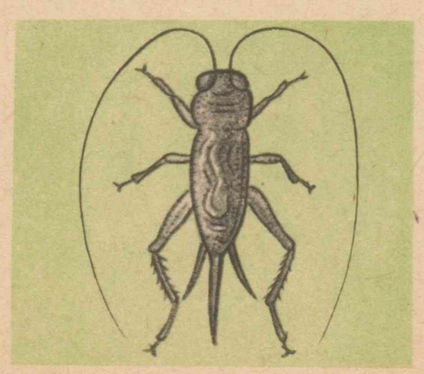
「わたしも、つかまえたわ。へんなコオロギよ。頭の先が平らで、三つにわかれているわ。」

「それは、ミツカドコオロギだよ。」

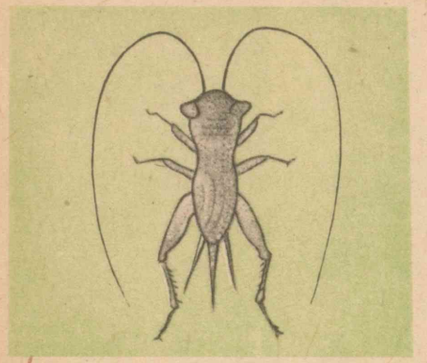
「じゃ、にいさんのとった大きなコオロギはなんというの。」

「エンマコオロギさ。コロコロ、コロコロ……って、さっき鳴いていただろう。あれだよ。」

「ミツカドコオロギは、どんなふうに鳴くの。」
「さあ――わからないね。かってしらべてみようよ。」
「にいさん、コオロギには、おしりのけんの長いのと、短いのがありますね。」
「それは、めすとおすのちがいだよ。」
「じゃ、どっちが鳴くの。」
「さあ、どっちだろう。両方とってしらべてみよう。」
ふたりは、二つのびんに土を入れて、その中へエンマコオロギと、ミツカドコオロギを、べつべつにはなしました。それから切ったなすを



入れて、金あみをかぶせました。いくら待っていても、なかなか鳴きません。
「明かるいから鳴かないのだろう。」
にいさんはこういって、へやのすみの暗いところへ、びんを置きました。



しばらくすると、
「コロコロ、コロコロ……。」
と、エンマコオロギが鳴きだしました。
「いよいよ鳴きはじめたよ。」
すると、別のびんからも、
「リリリ、リリリ……。」

と、鳴きだしました。

「あっ、ミツカドコオロギね。」

ふたりはうれしそうに耳をすませました。

よく見ると、はねを立てて、ふるわせながら鳴いています。

鳴いているのは、みんなけんの短いコオロギでした。このコオロギは、はねにぎざぎざしたもようがあるので、すぐ見分けがつきます。

「みよ子、わかったろう。鳴くのはおすで、めすは鳴かないんだよ。おしりのけんの長いのはめすだよ。このけんは、産らん管といって、たまごを生む管だよ。」

「まあ、こんな管でたまごを生むの。」

「この長い管を土の中にさしこんで、たまごを生むんだよ。そのたまごは、土の中で冬をこして、春になると、かわいいコオロギになるんだよ。」

「このびんの中でもたまごを生むかしら。」

「きっと生むよ。」

「わたし、かってみたいわ。来年の春、たまごから小さなコオロギが出たらどんなにかわいいでしょうね。」

ふたりは楽しそうに話しあいながら、続けてコオロギをかってしらべることにしました。

二　赤いはね

（一）愛の心

あきらさんと妹のきよ子さんは、土曜日の午後、おとうさんといっしょに町へ出かけました。まえからやくそくしてあった野球のバットと、なわとびのつなを買っていただくためです。

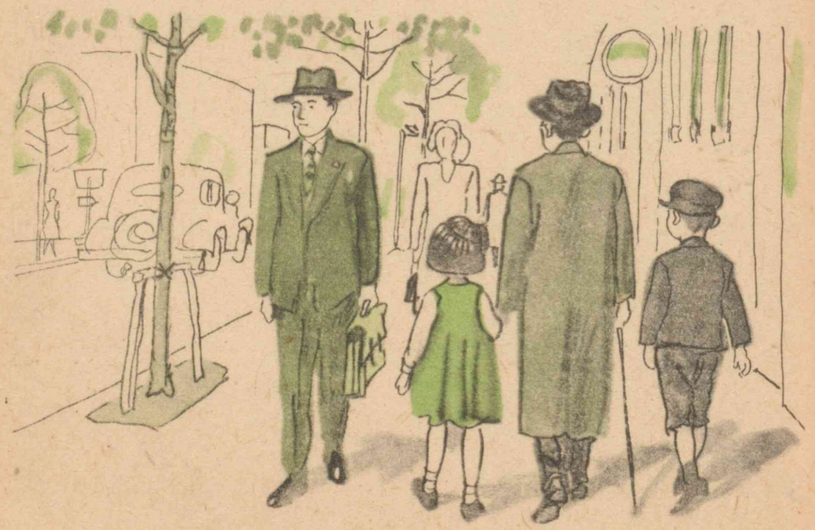
きょうだいが、なかよく手をつないで行くと、むこうからぼうしのリボンに、きれいな赤いはねをつけた、おとなの人が歩いてきました。

「あら、男のくせに赤いはねなんかつけておかしいわ。どうしてでしょう。」

と、きよ子さんが、ふしぎそうにいいました。

「ちがうよ。あれは愛のはねといって、共同ぼ金のお金をきふしたしるしなんだよ。ねえ、おとうさん。」

あきらさんが、とくいになっていいました。



「そうだ。よく知っているね。ところで、共同ぼ金は、なんのためにするか知っているかね。」
「ぼく、よくは知らないんだけれど、たくさんの人からお金を集めて、こまっている人たちにあげるためでしょう。」
「そのとおりだ。世の中には、さいなんや、病気のためにこまっている人や、年をとって身よりのない人や、みなしごなどのように、気のどくな人がたくさんいるからね。だが共同ぼ金、つまり国民たすけあい運動の目的はそれだけではない。そういう人たちのことを、自分のことのように心配してあげる、やさしい愛の心をみんなが持つようにというのも、目的の一つなんだよ。これからの世の中では、お

たがいに助けあうことがいちばんたいせつだからね。」
「愛の心って、親切な心のことでしょう。」
きよ子さんが、そばから口を出したので、おとうさんはにこにこしながら、
「そうそう、きよ子もよくわかるんだね。けれども、親切にしようと思うだけでは役に立たない。愛の心をほんとうにあらわすために、お金をきふするのだよ。」
「それでは、ぼくも町角に立って、共同ぼ金をしてもいいの。」
「愛の心さえ持っているなら、だれがやってもいいのだよ。けれども、めいめいかってにしたのでは、整理にもこまるし、それにお金のことだから、せわをするかかりがきまっ

ているのさ。その人たちが、ことしはどのくらいお金を集めて、どんなことに使うか、はっきりした計画を立て、それから日をきめてみんなにたのむようになっている。だから、おまえたちも、大きくなったら、進んでやるのだよ。でも、愛の運動は共同ぼ金だけではないから、子どもでもできることがたくさんある。」

「それなら、この間ぼくたちの組で、お金を出しあって、水害みまいをしたのも、たすけあい運動になるんですか。」

「そうだ。いいことに気がついたね。思いがけなく不幸なめにあった人たちに、みまいの品物を送ったり、友だちの病気みまいなどをするのも、みんな愛のたすけあい運動にな

るのだ。」

「おとうさん、この運動は、日本だけですか。」

「いやいや、外国ではもっとさかんに行われている所もある。この運動のおこりは、千八百七十三年に、イギリスのリバプールという所で、こまっている人たちをすくう運動として始められたのだが、今ではアメリカがいちばん発達している。アメリカでは、共同ぼ金のカードを家々にとどけると、電気代でもはらうように、気軽くきふするそうだ。」

「でも、どうして赤いはねをつけるの。」

きよ子さんが、首をかしげてききました。

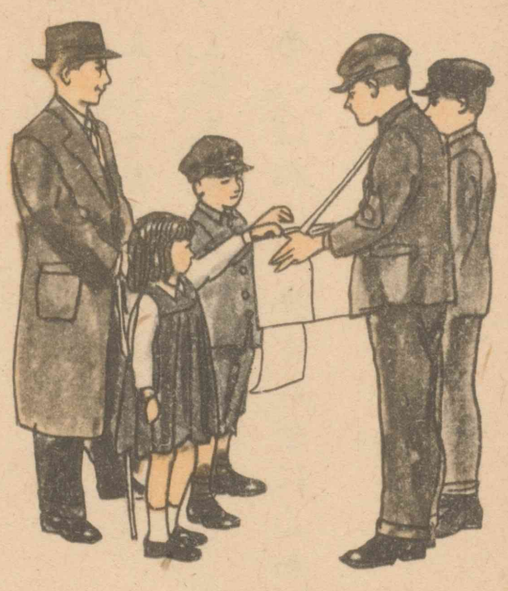
「それは、赤いはねが、美しい愛の心を表わすのに、いち

ばんにあうからだろうね。もっとも、むかし中国では、名よのしるしに、赤いはねを使ったこともあるそうだし、アメリカ土人が、勇気のあるしるしに、赤いはねを頭にさしていたともいわれている。だから、けだかい愛のしるしとして使っているわけだ。」

「ぼくも、早く共同ぼ金をしてみたいなあ。」

「わたしも、赤いはねをむねにさしてみたいわ。」

話しながら、三人が駅の前まで来ると、うでに共同ぼ金のしるしをつけ



た学生さんたちが、

「共同ぼ金を、おねがいしまあす。」

と、大きな声でよびかけていました。

あきらさんときよ子さんは、すぐにそばへ行って、自分のこづかいをきふしました。おとうさんも、お金をはこに入れました。

学生さんは、

「ありがとうございました。」

といいながら、赤いはねを三つわたしてくれました。
きよ子さんは、うれしそうに赤いはねをむねにつけました。
あきらさんは、ぼうしのわきにつけ、おとうさんは、洋服のえりにさしました。
あきらさんときよ子さんは、にこにこしながら、むねをはって歩きました。
赤いはねは、歩くたびにふわふわとゆれました。

（二）　赤いはね

たかし　　みよ子
とみ子

時
十月のはじめ、日曜日の晴れた朝
所
原っぱ

みよ子と、つる子と、とみ子が、草の上にすわって、けしきを写生している。

みよ子　「つる子さん、向こうの山、きれいな色をしているわ

ね。」

つる子　「ええ、見れば見るほど
いい色になるのよ。」

とみ子　「わたし、こんな青い空
どうしてもかけないわ。」

みよ子、とみ
子の絵をのぞ
きこむ。

みよ子　「あら、じょうずにかけ
ているじゃないの。ほ
んとうの空のようよ。」

とみ子　「そうかしら。あきらさんだったら、もっとじょうず
にかくわねえ。」

つる子　「あきらさん、おそいわね。」

とみ子　「早くきて、教えてくれるといいのにねえ。」

もずが鳴く

みよ子　「もずが鳴いているわ。」

つる子　「あのもずの声を、絵にかけないものかしら。」

とみ子　「紙のすみの方に、もずが鳴いています——って、か
くといいのよ。」

みんなわらう。

たかし、赤いはねをぼうしにつけて出て来

る。みんなの前に立つ。

たかし　「写生しているの。(のぞきこんで)じょうずだなあ。」

みよ子　「よくかけなくてこまっているのよ。」

つる子　「だから、前に立たないでね。」

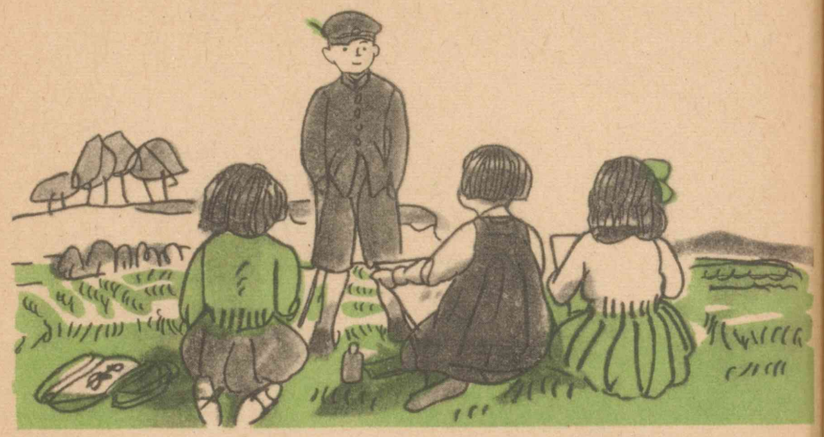
たかし　「ぼくをけしきの中に入れてかかないかなあ。そうしたら、絵がもっとおもしろくなるよ。ね、見てごらん。ぼくのぼうしの赤いはね。きれいだろう。」

とみ子　「たかしさん、それ、共同ぼ金の赤いはねでしょう。」

つる子　「どこで買ったの。」

たかし　「駅の前で拾ったんだよ。」

みよ子　「拾ったの。では、買ったのではないのね。」



とみ子　「それではつまらないわ。」

たかし　「拾っても買っても同じだよ。さ、ぼくを入れてかいてごらん。」

とみ子　「たかしさん。どいてよ。」

つる子　「じゃまをするものじゃないわ。」

たかし、みんなの前に立ったままどかない。みんなこまる。

あきら、写生の道具を持って出て来る。あきらもぼうしに赤いはねをつけている。

あきら　「おそくなってごめんね。」

つる　「みんなで待っていたのよ。」

たかし　「きみも、赤いはねをつけているんだね。ぼくのとくらべてみよう。」

ぼうしをぬいでくらべる。

たかし　「すっかり同じだ。今度は、ぼうしをかぶってくらべてみよう。」

ふたり、ぼうしをかぶってならぶ。

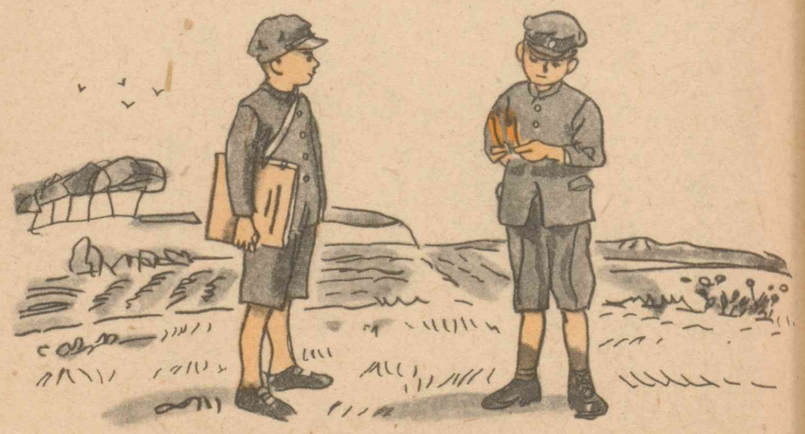
たかし　「ね、とみ子さん、同じだろう。ぼく、うれしいなあ。」

とみ子　(みんなに)「でもねえ—。」

たかし、うれしそうにあたりをとびまわる。あきら、みよ子とならんでするわる。

たかし　「あきらくん、その赤いはね、どこで拾ったの。」

あきら　「ぼく、お金をきふして、そのかわりにもらったんだよ。」



たかし　「どこで。」

あきら　「駅の前で。」

つる子　「駅の前に学生さんがたくさんいて、赤いはねを売っていたわね。」

あきら　「みんな口々に、『国民たすけあいの共同ぼ金です。どうぞきふしてください。』っていったよ。」

とみ子　「去年も今ごろ赤いはねを売っていたわね。」

あきら　「いや、売っているのではないよ。気のどくな人たちを助けるために、お金をきふした人にくれるんだよ。」

みよ子　「赤いはねをつけている人は、みんなお金をきふした人ばかりね。」

あきら　「日本中の人が、みんな赤いはねをつけたら、どんなに美しいだろうっていったよ。」

つる子　「きれいでしょうね。」

あきら　「色や形のことではなくて、親切な心が日本中にひろがっていることが美しいことなんだよ。」

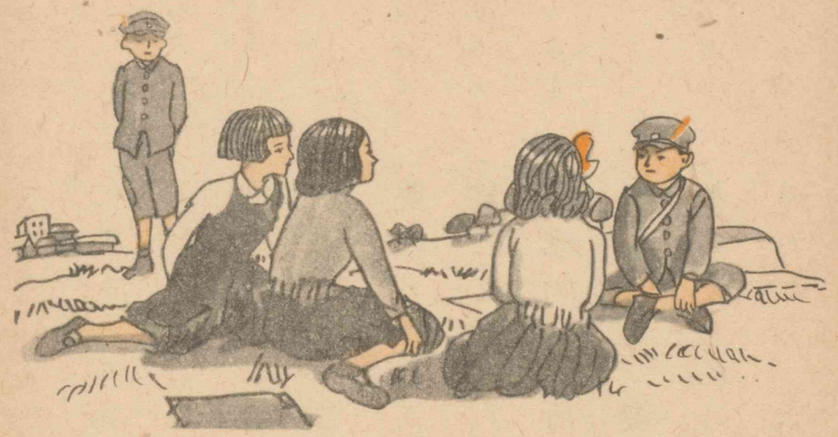
みよ子　「気のどくな人はいっぱいいるのね。」

あきら　「家のない人だっていっぱいいるだろう。」

つる子　「外地から、何も持たずに引きあげてきて、こまっている人も、親のない子も。」

あきら　「養ってくれる人のない年よりも。」

みよ子　「それから、大風や大水でひどいめにあった人も、た



くさんいるわ。」

あきら　「みんな助けあわなければいけないんだね。」

つる子　「あきらさん、いくらきふしたの。」

あきら　「十円。」

みよ子　「そのお金、おかあさんからいただいたの。」

あきら　「ううん。ぼくのこづかいだよ。ぼく、家の手伝いをしていただいたお金があった

んだよ。」

みよ子　「よかったわね。」

つる子　「わたしもきふして、赤いはねをもらいたいわ。」

とみ子　「わたし、きょうからもっともっと、うちのお手伝いするわ。」

つる子　「赤ちゃんのおもりや。」

とみ子　「おそうじもするわ。」

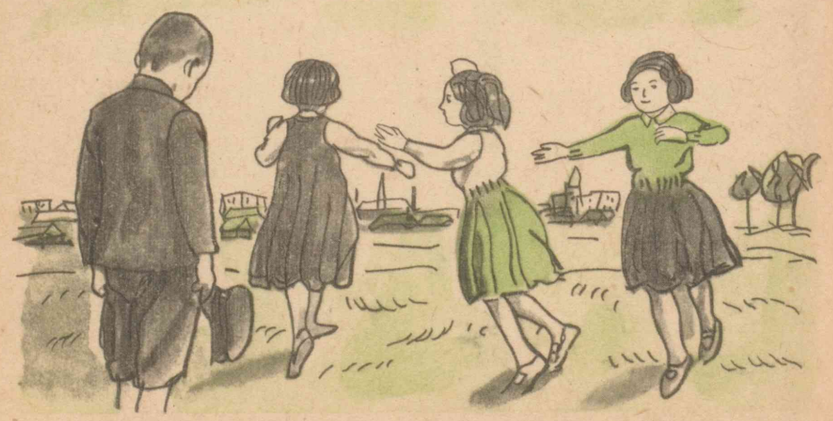
みよ子　「おこづかいをもらって、みんなおそろいで赤いはねをつけましょうね。」

あきら　「国民たすけあい、共同ぼ金。」

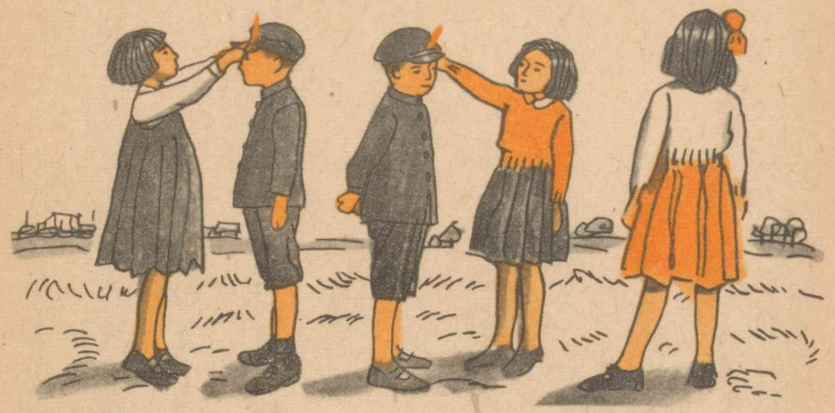
みんな　「国民たすけあい、共同ぼ金。」

とみ子　「わたし、このことばを、つくえの前にはっておくの。」
つる子　「あきらさん、そのはね、ちょっとかしてちょうだい。」
つる子、あきらからはねをかりて、かみにさす。
つる子　「どう。」
みんな手をたたく。
みよ子　「とてもきれいよ。」
みよ子を先頭にして、つる子、とみ子、手をたたきながら、ぐるっとわになってまわる。
だまって見ていたたかしは、ぼうしの赤い

はねを取ってすてる。
みよ子　「あら、たかしさん、どうして赤いはねをすてるの。」
たかし　「ぼく、いらないんだもの。」
とみ子　「さっき、いばっていたじゃないの。」
たかし　「だって、これ、拾ったんだもの。ぼく、きふしないでつけているのははずかしいよ。」



つる子　「気がついていたのね。えらいわ。」
みよ子　「でも、この赤いはねにも、だれかの美しい心がこもっているのよ。すてるのはいけないわ。」
たかし　「じゃ、どうしたらいいの。」
とみ子　「そうねえ。どうしましょう。」
　　みんなで考える。
あきら　「わかった。たかしくんが、お金をきふして、その赤いはねをつければいいんだよ。」
　　みんな手をたたく。
みよ子　「それがいいわ。」
たかし　「じゃ、ぼくも働いて、こづかいをもらってきふしよ



うね。」
　　みよ子、赤いはねを拾って、たかしのぼうしにつける。とみ子、むねの赤いはねを、あきらのぼうしにつける。
つる子　「ふたりならんでごらんなさい。」
　　あきらとたかしならぶ。
つる子　「ふたりの赤いはね、こんどこそすっかり同じよ。」

とみ子　「とてもきれいよ。」

みよ子　「このつぎの日曜日には、みんなおそろいで、赤いはねをつけましょうね。」

あきら　「さ、写生しよう。」

みんな、写生にかかる。

たかし　「つる子さん、みよ子さん、とみ子さん、さっきはじゃまをしてすまなかったね。」

つる子　「いいのよ。でも、赤いはねをつける人は、人にめいわくなんかかけるものじゃないのよ。」

たかし　「うん。これから気をつけるね。」

とみ子　「ね、みんな、この絵をかいて、養老院へ持って行って、年をとった人たちをなぐさめてあげましょうよ。」

あきら　「それはいい考えだ。」

つる子　「では、じょうずにかきましょうね。」

たかし　「ぼくもかくよ。」

とみ子　「急いでお道具を持って来るといいわ。」

たかし、走って出て行く。

もずが鳴く。

とみ子　「あきらさん、秋の空って、どうしてこんなに青いんでしょうね。」

あきら　「みんなこんなにすみきった心になるといいね。」

みんな、楽しそうに絵をかく。

三　むかしの人の生活

（一）てんらん会へ

公園前で電車をおりた私たちは、大通りをまっすぐ進んで博物館へ急いだ。広い公園の木々が色づいて、秋の日に美しくかがやいている。しばらく行くと、正面に博物館のたて物が、私たちをむかえるようにそそりたっていた。

私たちは、博物館にひらかれている、とろ遺せきてんらん会の見学にきたのである。

門の左がわにあるきっぷ売場で、先生が入場けんを買っていらっしゃる間に、私たちは、身なりをととのえたり、ノートを出したりして見学の用意をした。

きっぷを手にした先生は、にこにこしながら、

「では、これから見学しましょう。とろ遺せきは、しずおか

県の『とろ』からほり出されたもので、二千年以上もたったものです。ここにちんれつされた品物を見ると、むかしの人人が、どんな家を作り、どんな道具を使って生活していたかがよくわかると思います。見学しながら、今の私たちの生活とひきくらべて、研究してみることにしましょう。会場には、大ぜいの人たちが見学にきていますから、人のめいわくにならないよう注意しましょう。」

と、おっしゃった。

（二）むかしの家

広いへやには、大きなガラスのちんれつばこがいくつもあ

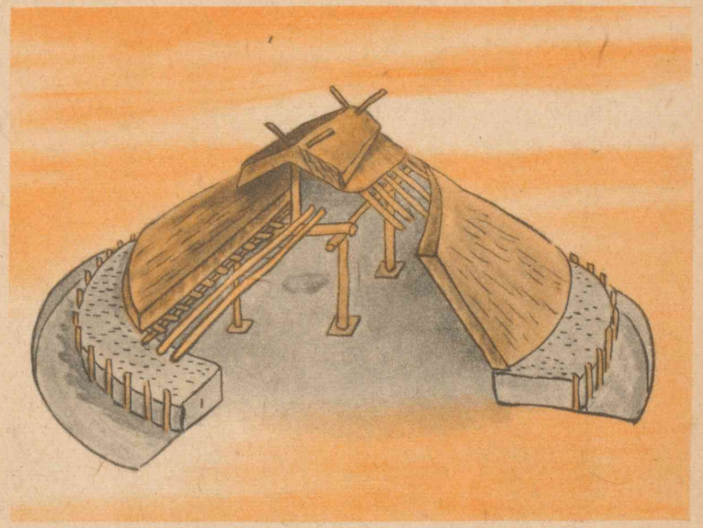
って、その中にほり出された柱、土台板、屋根の一部分などがならべてあった。

ふと見ると、そばに今まで見たこともないふしぎな形をした家のもけいがあった。私たちは、じっとそれに見入ってしまった。みんなは、

「この家は、今とちがって、家の形も、屋根も、まるく作ってあるね。——柱はたった四本だ。」

「屋根のすそが、地面につくようになっているから、今の家とちがって、かべがないのだね。」

「ゆかは土でかためてあって、高さが地面と同じになっているね。」



などと話しあっていた。

すると先生が、

「みなさん、なかなかいいところに気がつきましたね。では、このめずらしい家のもけいを見ながら、とろの家について少し説明しましょう」。

こういって、つぎのようなお話をしてくださった。

「このもけいはとろでほり出された柱、土台板、屋根などを参考にして作ったものです。

ほり出された家のあとには、直けい十メートルぐらいのまるい形に、小さいくいを二列に打ちこんで、さくにしてあります。その間には、土を入れて打ちかためてあります。さくの内がわはゆかになっていて、ゆかの中ほどに四本の柱が立っています。

そこのちんれつばこに、土台板がならべてあるでしょう。今の家の土台は、石やコンクリートなどを使っていますが、このころは、板を使ったのです。たぶん、柱だけ立てると、家の重みで、柱が土の中にくいこむので、これをふせぐために土台板をくふうしたものでしょう。土台板は一まいだけのこともあるが、二まい三まいと重ねて、じょうぶにし

たり、高さをかげんしたりしたようです。

この柱に、はりやけたをかけ、むねを作って家のほね組ができあがるのです。そのけたやはりに、たる木がななめにかけられて、草ぶきのまる屋根がのせてあります。みなさんが発見したように、屋根は今どだいぶかわっていて、すそが地面につくようになっています。」

その時、たかしくんが、

「先生、二列にさくを打ちこんで、その間に土をもってあるのは、なんのためですか。」

と、質問すると、先生は、

「これはたぶん、家の中に水がしみこんだり、しめり気のく

るのをふせぐしくみと考えられます。このさくの外がわに、せまいみぞをほった家もあります。ちょうどキャンプ生活をする時、テントをはって、そのまわりにみぞをほるのと同じわけです。」

と、お答えになった。つづいて、ちよ子さんが、

「ゆかのまん中に、土をほりくぼめた所があります。あれはなんですか。」

と、たずねた。先生は、

「それは、火をたく『ろ』です。むかしの人がどんなに火をたいせつにしたかということは、みなさんも知っていましたね。ところの人々も、このように家のまん中に『ろ』を作って、その

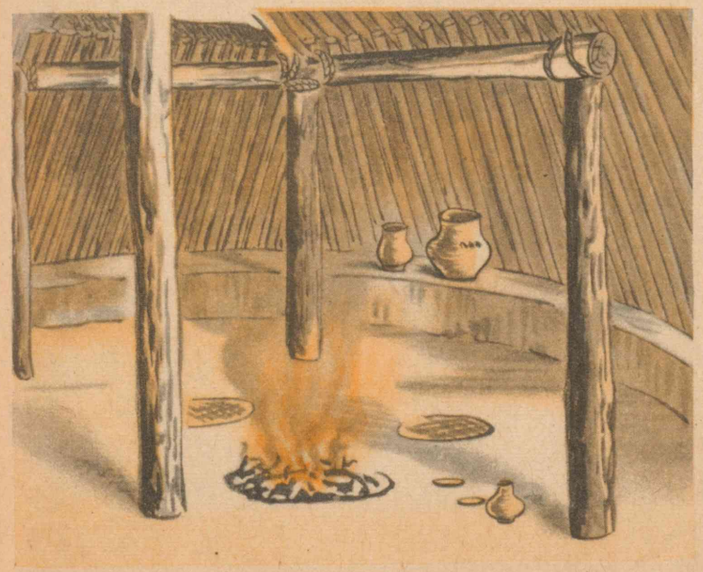
まわりはいつもきれいにしていたようです。

ここでたかれた火は、物をにたり焼いたりするにも使われ、寒い時にはこれであたたまり、あかりにも、使われたのです。」

と、お答えになった。

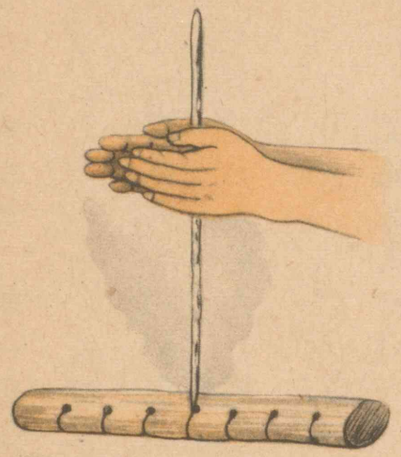
すると、しげるくんが、

「どろの人は、どんなしかけで、火だねを作ったのですか。」



と質問した。

「それは、もみきり発火といわれる方法です。そこに、その発火具の一部がならべてあるでしょう。もみきり発火というのは、板にあけた小さいあなに、木のぼうを立てて、きりをもむように、それを早くまわすのです。すると細かい木のくずが火になります。それが落ちて、下に置いてある火のつきやすいほ口にもえつくのです。



どろの家は、七八人までが住めるくらいの広さになっていま

す。ですから、寒い日などこの『ろ』をかこんで、両親を中心に、一家族のものがなかよくくらしていたのだと思います。

では、こうした家に住んでいた、とろの人々は、いったいどんな道具を使って生活していたのでしょうか。つぎのへやには、ほり出されたいろいろな道具がならべてあります。

今度は、グループにわかれて、それを調べることにしましょう。」

と、先生は説明された。

私たちは、先生といっしょにつぎのへやへ行った。

(三) いろいろな木器

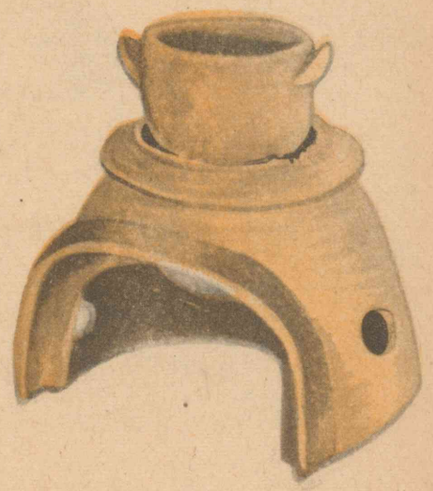
へやにはいると、ちんれつばこには、木で作ったいろいろな形の道具がならべてあった。

私は、しげるくんとよし子さんと三人で、それを見たり、説明書きを読んだりして調べることにした。

はじめに私たちの目についたのは、「こしき」と「かめ」であった。

とろでは、物をにたきするのに、土を固めて作った土器が使われていたのだ。そのころの人たちは、山や海に出かけてけものや魚などをとったようであるが、おもな食物は、今の私たちと同じように米だったのである。

米をたくには、まず、土で作ったかめいっぱいに湯をわかし、その上にこしきを重ねる。こしきのそこには、小さなあながあいていて、そのあなにすのこやぬのをしいて、あらった米をのせる。すると、下から熱い湯気が通って、米がむされるようになっている。



よし子さんは、こしきとかめを一心にノートに書いていた。

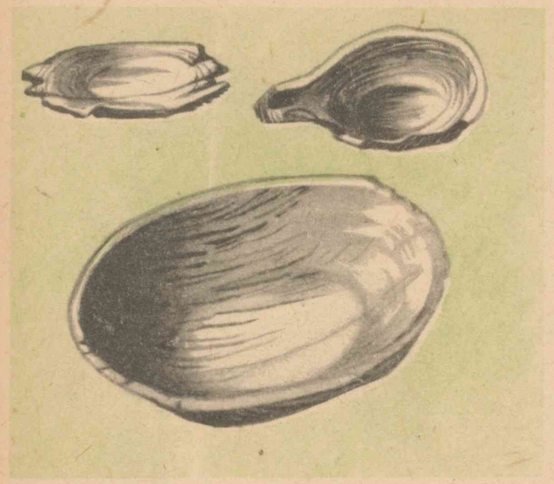
そばの説明書きを読んでいたしげるくんが、

「今、私たちのうちで、こわめしをたいたり、もちをついたりするのは、お祝の時だけなのに、とろの人たちは、こわめしやもちが、毎日の食べ物だったんだね。」

というと、よし子さんが、

「では、毎日お祝いをしていたようなものね。——私いま考え

たのだけれど、私たちの家でお祝いの時、こわめしをたいたり、おもちをついたりするのは、大むかしの人たちのこのようなならわしが、そのまま残っているのではないかしら。」

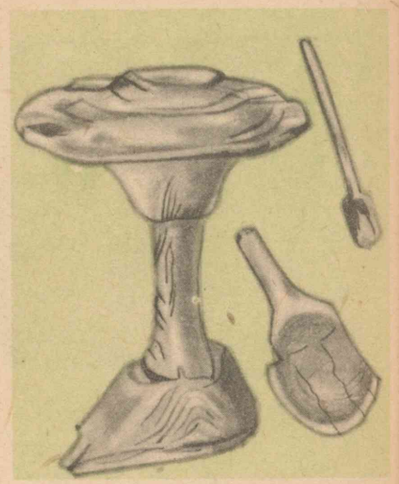


といったので、私としげるくんは、

「よし子さんは、おもしろいことを考えたね。」

と、にっこりわらいながら顔を見合わせた。

つぎのはこには、木で作ったさまざまの食器やいれ物がならべて

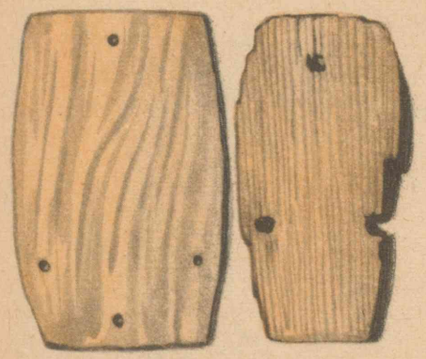


あった。今、私たちの家の台所で使っているせと物のかた口そっくりのものや、はち、さらなどもある。アイスクリームをたべる時使うスプーンの形をした長方形のさじや、今の物と少しの変りもないしゃくしもある。食べ物をのせるたかつきは、台とさらとがじょうずに組み合わせて作ってあった。

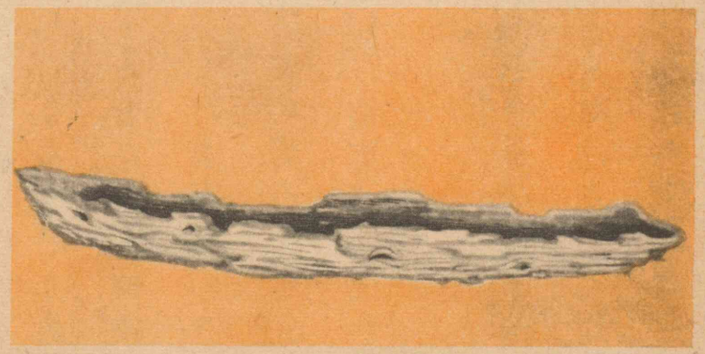
だんだん見ていくうちに、半分焼け残った長さ一メートルぐらいのまる木船の形をしたものがあった。これはたぶん、田へ行ったり、かり取ったいねを運ぶのに使われた田船だろ

うということである。

どろの田は、水が深かったとみえて、まる木船のほかに、仕事をする時、田げたを使ったようだ。今、私たちのはいているげたと同じように、はなおのあながが三つのもあるが、中にはあなの四つあるめずらしいものもあった。



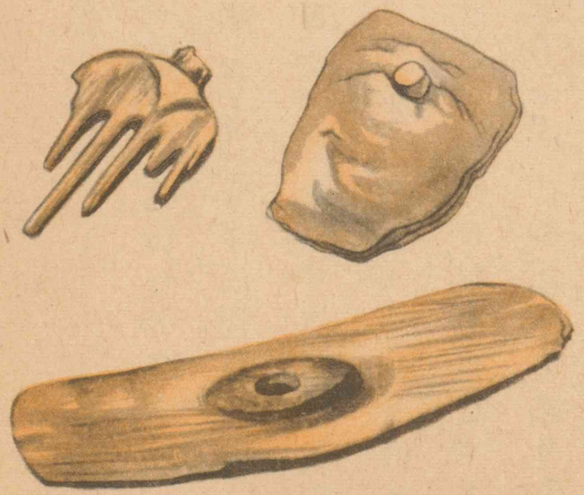
田をたがやすために使った、くわ、



すき、まぐわなどもほり出されてあった。このごろ、農家で使っているものとちがって、はのさきまで木で作ってある。まだ、鉄で作った道具は使っていなかったのだと思った。

ちょうどそこへ、先生がいらっしゃったので、

「どろの人々は、いろいろの道具をほとんど木で作っています。くわやすきまで木で作っていますが、たがやすのに、木ではあまり役にたたなかっ

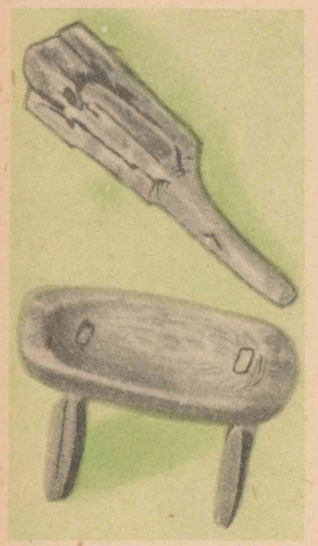


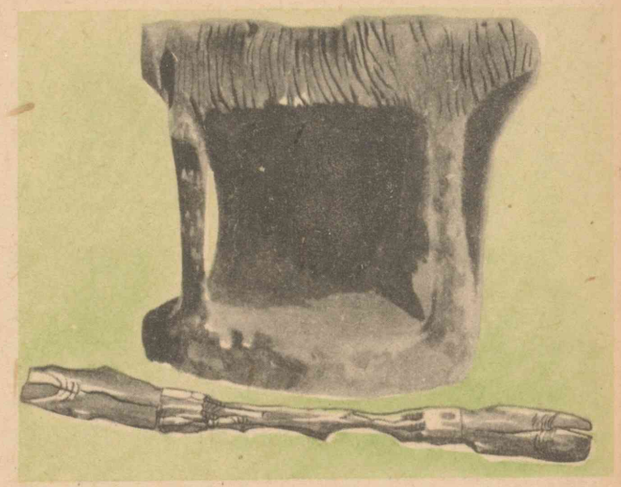
たのではないでしょうか。」

と、しげるくんがたずねた。

すると、先生はちんれつ品をじっとごらんになって、

「なるほど、だが、とろの人々は木をじょうずに利用していますよ。木目を見るとわかりますが、くわやすきは、質のかたいかしを使っています。そのほかの物は、さいくにつごうのよいすぎが材料になっています。とろの田は、しめり気の強い田だったので、このくわやすきでも、十分役にたったのだと思います。





と、おっしゃった。

私たちは、それから、きね、こしかけ、木づち、はたおり道具などのめずらしいものを見てまわった。

むかしの人の生活がいろいろとわかっておもしろかった。

外に出ると、明かるい秋の日が広い庭一面にかがやいていた。

私たちは、むかしの人の生活を思いうかべながら、きれいなしばふの上で、楽しくべんとうを食べた。

四　話を買う話

むかし、あるいなかに、正太という男が住んでいました。

ある日、正太は用事があって、遠い都へ旅に出ました。いなか者の正太には、見るもの聞くもの、めずらしいものばかりでしたから、用事をすましてからも、町の見物に二三日くらしてしまいました。

しかし、少し日がたつと、いなかへ帰りたくなりました。

「いなかへ帰るには、何かおみやげを買って帰りたい。」と、いろいろ考えたすえに、ふと、子どものじぶん、おじさんから、

「都には『話』を売る店がある。」という話を聞いたことを思いだしました。

そこで、正太は、何かよい「話」を、二つ三つ買って帰ろうと思って、「話」を売る店をさがしますと、やっと一けんの店が見つかりました。

正太が、その店の中へはいっていって、

「『話』を買いたいのですが、一ついくらですか。」

ときますと、

「いくらのもあります。高いのも、安いのも、中ぐらいのも。」
と、主人は答えました。
「では、安いのを一つ。」
といって、正太が主人にお金をわたしますと、主人は、急にあらたまった声になって、
「いそがば、まわれ。」
といいました。

正太は、もっと話のさきがあるだろうと思って、待っていましたが、主人がそれっきり何もいわないものですから、

「『話』はそれだけですか。」
とききなおしますと、主人はもとの声になって、
「これだけです。」
と答えました。
正太は、心の中で「なんというつまらない話だろう。こんな一口の『話』にお金をとるのはずいぶんひどい。」とは思いましたが、また思いなおして、「せっかくだから、もう少しお金を出して、もう一つ『話』を買って行くことにしよう。」と思って、あらためて、正太はまえのお金の二倍わたしますと、主人はまたあらたまった声になって、
「やさしい声に気をつけよ。」

といいました。
「それだけですか。」
と、今度はすぐききかえしました。
「そうです。これだけです。」
と、主人はまたもとの声になって答えました。
正太は二度びっくりしました。しかし、また心の中で、
「これでは、おみやげにならないから、もう一つふんぱつして、いちばん高い『話』を買うことにしよう。」と思って、

はじめに出したお金の三倍分出して、
「では、いちばん高いのをください。」
と、声に力をこめていいました。
すると、主人はまたあらたまった声になって、
「短気は、損する。」
といいました。
「いちばん高い『話』が、それだけですか。」
「これだけです。」

今度は、正太はおどろくよりおこってしまって、主人にあいさつもしないで、その店をとび出しました。そうして、大急ぎで家へ帰ることにしました。

それから何日かたったある日、正太は、ある川の岸に出ました。まえに雨がふったとみえて、川の水がだいぶふえていました。

ところが、その川にかかっている橋は、たいへん細くて弱そうでした。それを見ると、正太はふと、

「いそがばまわれ。」

という「話」を思い出して、なるほど、「あの話屋のいったのはこのことらしい。」と、ひとりごとをいいながら、まわり道して、川上の広いじょうぶな橋をわたりました。わたりながらその橋の上から、さっきの川下の細い弱そうな橋の方を見ますと、橋はいつのまにか水に流されていました。

それを見ると、正太はぞっとして、「ああ、まわり道をしてよかった。先

を急いで、あの橋をわたっていたら、今ごろはこの川の中に落ちていたにちがいない。あの『話』のおかげで命拾いをした。」と喜びました。

それから、また二三日後のある夕方、正太はあるいなか町につきました。そこで、どこの宿屋にとまろうかと、思案していますと、とつぜんひとりの男がそばにきて、やさしい声で、

「どうぞ、私の宿におとまりください。」

といいました。

正太はその声を聞くと、すぐ、

「やさしい声に気をつけよ。」

という二番目の「話」を思いだして、

「これだ、これだ。男のくせにこんなやさしい声の男は、ゆだんができないぞ。」と考えましたので、返事もせずにさっさと歩きつづけました。そうして、町はずれの小さい宿屋にとまることにしました。が、とまってみると、小さいうえにへやがきたなく、おまけに食べ物がまずいのでへいこうしました。

ところが、そのあくる朝のことです。正太が夜の明けるの

を待ちかねて、宿を出てしばらく行った所で一ぷくしていますと、前を通りかかった二三人の人が、こういう話をしているのが聞こえました。

「あの宿屋で金をとられたうえに命までとられたというのは、外からはいったどろぼうのためじゃないと思うね。」

「わしもそう思うね。」

と、中でいちばん年上らしい人が、

「わしは、あの、へんにやさしい声をした客引きの番頭があやしいと思うよ。」

といいました。

この話を聞くと、正太はびっくりしながらも喜びました。

「悪者が、外からはいったどろぼうにせよ、あのやさしい声の男にせよ、どちらにしても、あの宿屋にとまらなくてよかったわけだ。こうなると、あの『話』は安いもんだなあ。」と、正太は思いました。

それから四五日たって、正太はやっと自分の村に帰りました。村につくまえに日がくれましたので、村についた時は、もうすっかり夜になっていました。ところが、正太が家の前

までき ますと、まどのしょうじに男のかげがうつっていましたので、正太はびっくりして立ちどまりました。うちには、女ふたりのほかに、男はいないはずだが、……もしかすると、この間の宿屋の話のようにどろぼうかも知れない。」と思ったからです。

そこで、正太はそっとうらにまわって、物置からおのをとり出しました。そのときふと、「短気は、損する。」という三番めに買った話が、正太の頭にうかびました。正太はもうあの話屋の主人の「話」をすっかり信用し

ていますので、しずかにおのを物置にしまって、表の方へ歩いて行きました。そうして、しずかに戸をたたきました。

すると、

「どなたですか。」

という声といっしょに まどのしょうじがあいて、中から顔を出したのは、となり村の、正太が二三度しかあったことのないわかい人です。家の中にはいってから聞きますと、正太のるすの間、女ふたりだけでは用心が悪いというので、夜の間だけ、るす番にきてくれていた人でした。

それを聞くと、正太はその人に礼をいってから、るす番をしていた人々に、帰り道であった話を聞かせました。そうして、

「また『話』のおかげで、こんどは自分が人ごろしになるところを助かった。『話』を買った時は、だまされたような気がしたが、今になって考えると、安すぎたくらいだと思うよ。」

と、正太がいいますと、

「そのおみやげの『話』は、あなたの命が助かったばかりでなく、私たちにも何よりのおみやげです。食べ物や着物はなくなりますが、このおみやげの『話』は、一生役にたつんですから。」

といって、るす番の人々も心から喜びました。

五　動物の冬ごもり

寒い冬の間を、動物たちは、どのようにしてすごしているのでしょうか。動物のすきなあきらさんは、このことについて調べてみました。ちょうや、はちなどのように死んでしまう虫は別として、まゆをつくって、さなぎで冬をこす虫、あたたかい土地へとんで行って住む鳥など、いろいろ冬ごしのしかたのあることがわかりました。

あきらさんが、いちばんおもしろいと思ったのは、へびや、

とかげや、かえるのように、冬中、土の中などにもぐって寒さをよけながらねむっている動物のことでした。

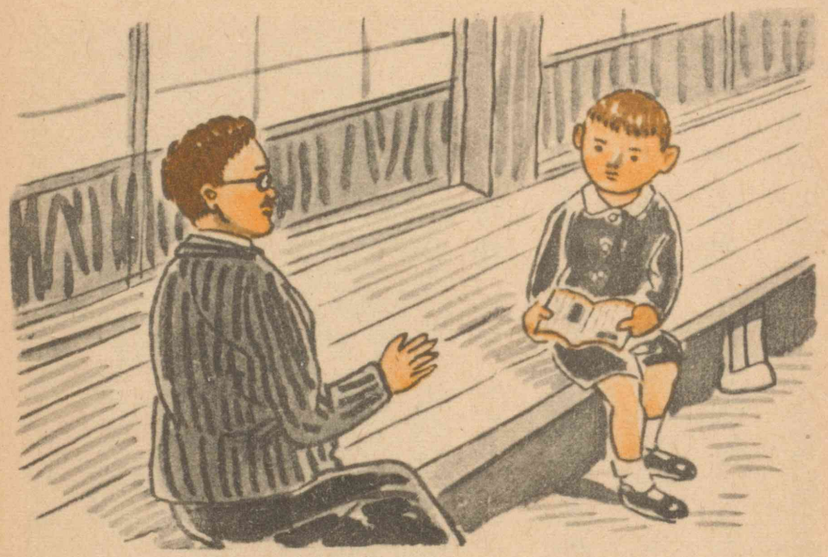
ある日、近所のおじさんがあきらさんの家へ遊びにきました。そのおじさんは、動物のことをいろいろ研究している学者です。おじさんは、あきらさんの読んでいる本をのぞいて

「ほほう、動物の冬ごもりの本だね。おもしろいかね。」

とききました。

あきらさんは、にっこりわらってうなずきました。そして、

「おじさん、土の中でねむっているのは、へびや、かえるのようなものだけですか。」



とたずねました。

「いや、まだほかにもいろいろあるよ。そうだ、あきらくんは、ヤマネという動物を知っているかな。」

「えっ、ヤマネですか、聞いたことがありません。」

あきらさんはふしぎそうな顔をしました。

おじさんはわらいながら、

「これは、おとなでも知らない

人が多いが、日本の動物の中でもめずらしいものだよ。」

といって、つぎのような話をしてくれました。

「ふじ山のふもとや、東北地方の山々には、ヤマネという小さい、かわいらしい動物がすんでいる。この動物がつかまった時は、『世界的にめずらしい動物がつかまった。』という見出しで、新聞に出たり、ラジオで放送されたりしたこともあるくらいだよ。ヤマネはナンキンネズミよりも少し大きいくらいで、頭が

まるく、しっぽはリスのようにふさふさしていて、くるくるした大きな目玉はとくに人の目をひく。昼間は大木のうろや、山小屋の中などにねむっていて、夕方になると、木のえだからえだへ身軽にとびうつったり、何十メートルもある大きな木の根もとから、いただきの方まですると、のぼるようすは、リスよりも軽快だ。おもにこん虫を食べていて、山小屋などでは、てんじょうをさかさまになって

はい、とまっているハエなどをとって食べることがある。家でかってみると、バナナや、モモや、ナシのような、あまいくだものをよく食べるが、トンボやセミのようなこん虫は、とくによろこんで食べる。

このヤマネは、コウモリとともに、日本に産するけだものの中で、冬みんをする動物の代表的なものなんだよ。ふじ山のふもとでは、十一月のはじめごろから、四月のなかばごろまで、六か月以上もねむり続けるそうだ。」

聞いているうちに、あきらさんはおもしろくなって、

「そんなに長い間、どこにいるんですか。」

とたずねました。

「それは、木のうろや、落葉の中、あるいは地中にあなをほってその中で冬みんするのだ。

おもしろいのは、冬みん中のしせいだ。手と足とをおなかにあて、頭を足の間までまげて、おをその上にかぶせていて、まるで、手まりのようなかっこうになる。ある土地では、ヤマネのことを、マリネズミといっているが、これはそのしせいからおこった名まえだろう。

冬みんしている間は、体温、つまりからだの温度が下って、

れい度ぐらいになることがある。こうなるとからだはこおったようになり、手でさわるとますますちぢんでしまう。ちょっと見ると、こごえて死んでいるようだ。だから、ヤマネをコオリネズミといっている所もある。きこりや炭を焼く人たちが、このようなヤマネを見つけて、ポケットへ入れていると、いつのまにかはい出してびっくりすることもあるそうだ。

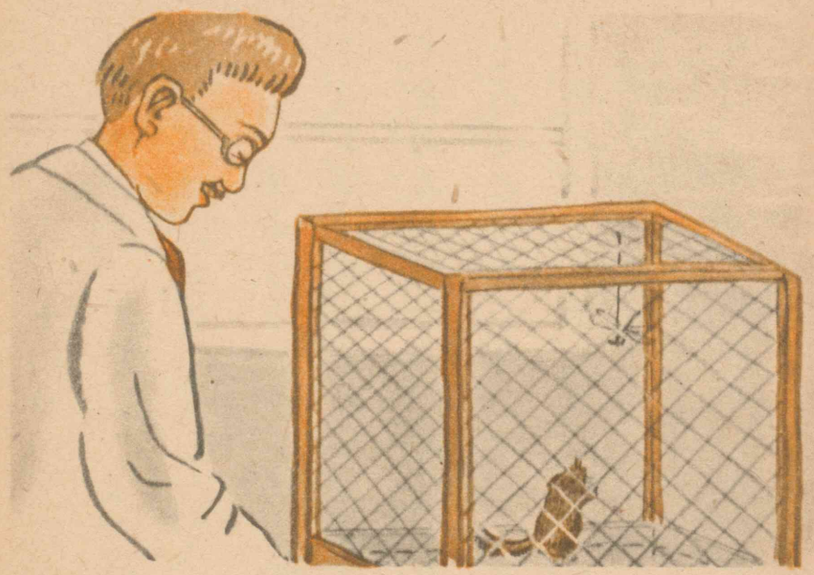
まだこの動物のくわしい事はわかっていないが、研究するとおもしろいことがありそうだよ。」

おじさんは、ここまで話すと、おかあさんの持ってきたお茶をのみながら、

「そうそう、ヤマネでは、おもしろい実験をした事がある。あきらくんは、チンパンジーという動物を知っているだろう。ある西洋の学者が、チンパンジーにどのくらいものを考える力があるかを実験してみた話がある。そこで、おじさんは、ヤマネにどのくらいちえがあるかためしてみた事があるのだよ。

ある日の夕方のことだった。ヤマネをかっているたて横高さともに七十センチメートルぐらいの四角な金あみのてんじょうから、細い糸にしばったトンボをつるした。トンボはちょうど金あみのまん中につるされている。すの中から出てきたヤマネがどうするだろうかと、金あみの中のようす

をじっと見ていると、ヤマネはトンボを見つけ、そのまま下へきて、上の方をながめながら、ぐるぐるまわって、時にはあと足で立ち上ったりする。そのうちに、トンボをめがけて、ぱっぱっととび上り、何回もこれをくりかえした。しかしどうしてもとびつけない。今度はまわりの金あみにのぼり、右から左からなんべんもとびつくが、どうしてもだめだ。あきらめたのか、すの中にはいってしまった。それから三十分ぐらいたって、ヤマネはすから出てきて、かわいらしい目をぎらぎらさせながら、上の方をながめている。そしてまえのように、下から横からいっしょうけんめいトンボをめがけてとびつくが成功しない。またすの中



にはいった。

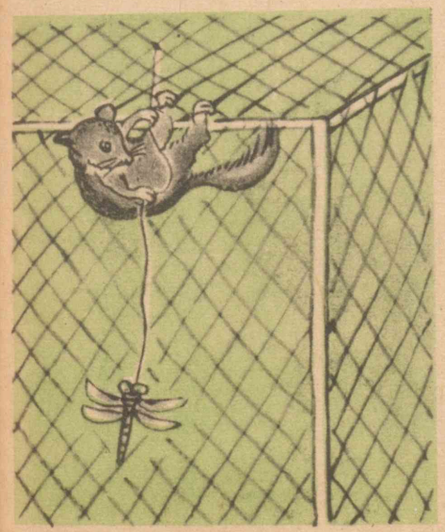
夕方から夜中の十二時ごろまで、ヤマネは何べんも同じことをくりかえしたが、やっぱりだめだった。そこで、私もあきらめて、観察をやめることにした。

ところが、あくる朝見ると、おどろいたことに、金あみの中には、糸だけがたれて、トンボはなくなっている。ふし

ぎに思って、その日の夕方を待って、また糸にトンボをつけ、きのうと同じところにつるした。

ヤマネはまもなく出てきて、ちょっと上の方を見たかと思うと、するすると金あみをのぼり、てんじょう伝いに糸のそばまで行き、あと足のゆびで金あみをつかみ、前足で糸をみごとにたぐりあげ、トンボをとってうまそうに食べてしまった。

私は、ヤマネのやりかたにすっかり感心した。てんじょう



から糸をたぐりあげてトンボをとるやりかたを、ヤマネがはじめから知っていたのでない事は、まえのばんの観察でわかっていた。ヤマネはいろいろやっていて、とうとうこんなやりかたを考えたのだ。ヤマネにもちえがあったわけだね。

それにしても、まえのばん、夜通し観察しなかった事が今でも残念でたまらないよ。」

あきらさんは、めずらしいヤマネの話を聞いて、たいへんおもしろく思いました。そうして、これからもますます、動物の研究を続けていこうと決心しました。

六　冬の生活

（一）雪のうち

雪が三日もふりつづいた。

にいさんと毎日、家の前の雪かきをしたが、その雪が山のようになった。

「にいさん、雪のおうちを作ろう」。

と、ぼくがいうと、

「作ろう」。

と、すぐさんせいした。

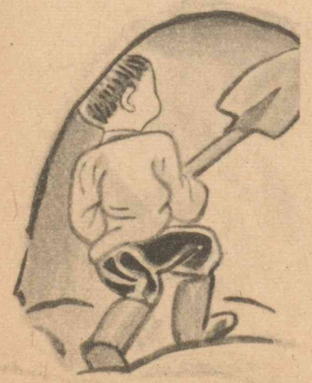
ふたりは、雪の山を、シャベルでたたいてはかためた。かためては、雪をもりあげて、ずっと大きくした。

それから、下の方から、トンネルのようにあなをほりはじめた。

ザクリザクリと雪をけずっては、運び出した。運び出すごとにあなが大きくなっていった。

やがて、しゃがむと、からだがすっぽりとあなにはいるようになった。

「にいさん、もっと深くほるの。」
「まだまだ。」
そこで、またふたりは、ザクリザクリと雪のかたまりをけずっては、運び出した。
ぼくはからだが熱くなってきた。
にいさんがあなの中の方にはいって、雪をけずる。ぼくは、それを運び出す。
あなは、だんだん大きくなり、深くなった。
「さ、もう仕あげにしよう。」



にいさんは、こういって、まわりのかべになっている所をきれいにけずった。
天じょうのでこぼこになっている所も平らにけずった。
おしまいに、ゆかをきれいにした。
「にいさん、むしろを持ってきて、ゆかにしこうか。」
「それがいい、しこう。」
ぼくは、なやから、むしろを一まい持ってきた。しいてみると、ちょうどよかった。
ずいぶん広いように思ったが、こうしてしいてみると、そ

んなに広くないことがわかった。
「さ、むしろにすわってみよう」。

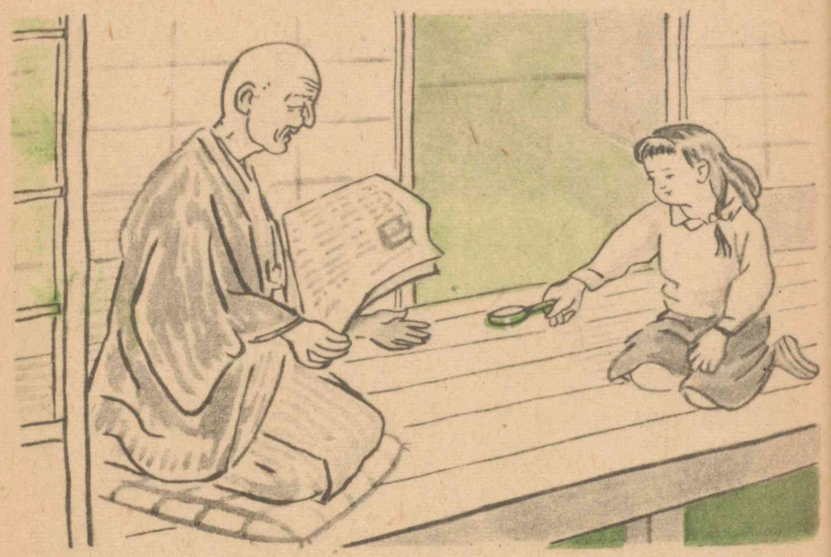
ぼくとにいさんはならんですわった。
なんだか、うれしいような、おかしいような気がして、わらいたくなってきた。
にいさんが、急に、
「エスキモーみたいだな」。
といってわらった。
「なあに、エスキモーって」。

「氷のうちを作って住んでいる人たちだよ」。
「どこにいる人たちなの」。
「北アメリカのずっとずっと北の方に住んでいる人たちさ」。
「にいさん、この雪のおうち、あたたかいね」。
「風がこないからあたたかいんだろう」。
「でも、てんじょうが落ちてきそうな気がするよ」。
「だいじょうぶだ。落ちてきたら、屋根をやぶって外に出るんだ」。

「明かるいね。雪のおうち。白ペンキぬりだから。」
「どこも、ダイヤモンド製だからね。」
それから、にいさんは、雪の明かるさで、本を読んだ人の話をしたり、エスキモーの話をしたりしてくれた。
ぼくは、夜になったら、ろうそくをつけて、もう一度雪のおうちにはいってみようと思っている。

(二) 虫めがね

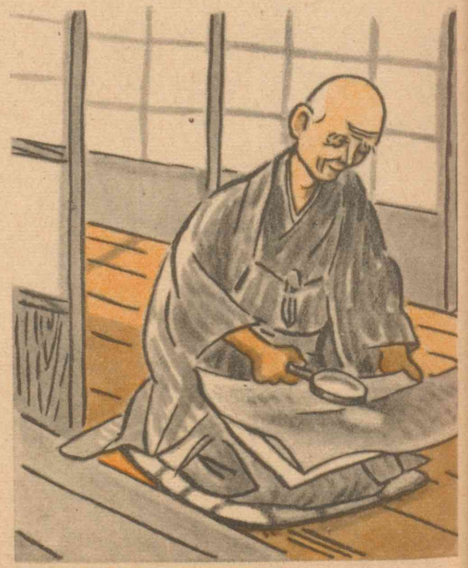
わたしが、ざっしを見ていると、おじいさんのよぶ声がしました。
「よし子、虫めがねを持っておいで。」



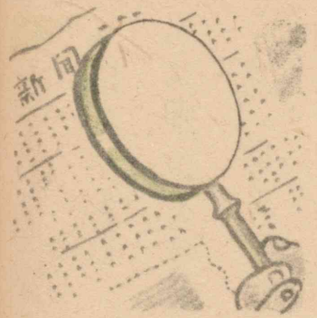
わたしは、おじいさんのへやから、虫めがねを持って、えんがわに行きました。
えんがわには、日がいっぱいさしこんで、ぽかぽかと暑いほどでした。おじいさんは、新聞を読もうとしていたのです。
「ありがとう。」
おじいさんは、虫めがねを受け取りながら、
「はやく、よし子が、新聞を読

んで聞かせてくれるようになるといいな。」
といいました。
わたしは、ほんとうに、はやくそうなりたいと思いました。
おじいさんが、虫めがねを持って、新聞を見はじめると、新聞紙の上に、まるい光がちらちらとうつりました。それは、ちょうど、「お日さまの子ども」のように見えました。
その「お日さまの子ども」が大きくなったり、小さくなったりして、ちらちらと光りま

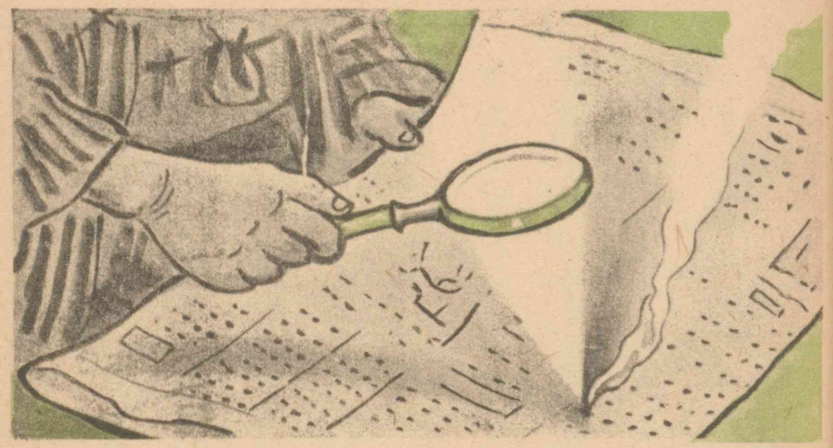
した。
「おじいさん。新聞紙の上に、『お日さまの子ども』が、遊んでいるわ。」
といいました。
おじいさんは、虫めがねから目をはなして、
「なんだ、『お日さまの子ども』って。」
と、わたしにたずねました。
「ほら、それよ。」
といって、新聞を指さしました。



「ははあ、なるほど、『お日さまの子ども』はよかったね。」
「これなあに、おじいさん。」
「これかい。これは、おまえのいうように『お日さまの子ども』だよ。お日さまの光を、この虫めがねが、小さく集めてくれたんだよ。」
「なんだか、おじいさんのおっしゃること、よくわからないわ。」



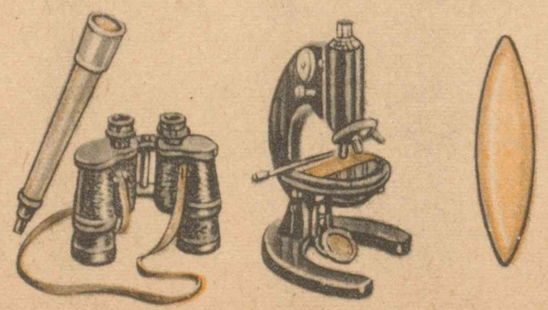
「この虫めがねが、お日さまの光を集めるのさ。ほら、新聞紙をごらん。『お日さまの子ども』が、大きくなったり、小さくなったりするから、いちばん小さくなった時が、光



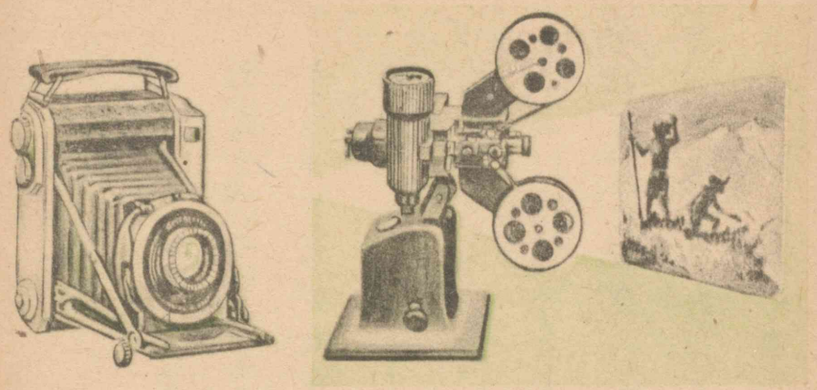
が一点に集まった時だ。あたたかい光をみんな集めて、一点にするのだから、たいした熱さになる。」
こんなことをいいながら、おじいさんは、「お日さまの子ども」を、だんだん小さくしていった。はりの先のように小さくなったと思うころ、新聞紙の上から、白いけむりがたちのぼった。
「おじいさん、火事、火事よ。」
と、わたしが大きな声をたてました。

おじいさんは、
「こんなになってしまった。」
といって、焼けてあなのあいた新聞紙を見せてくれた。
「じゃ、おじいさん、大きな、大きな虫めがねでやったら、もっとたくさん熱がでるわけね。」
「そうだ。一メートルもある大きな虫めがねでやったら、水をわかすぐらいわけはあるまいね。この熱を使って、何か機械を動かすこともできそうだ。」
「まるいガラスなら、どんなのでも、できるの。」
「いや、ちがう。これ、この虫めがねをいじってごらん。どうなっているかね。ただ形がまるいだけかね。平らかね。」

わたしは、指でしずかに虫めがねをさすってみました。すると、中ほどがふくらんでいました。
「そうだ。ふくらんでいるんだ。このふくらみで『お日さまの子ども』ができるのだ。また、ものが大きく見えるのだよ。」
おじいさんは、この中のふくれているガラスのことを「とつレンズ」ということ、とつレンズは、ものを大きくみせてくれること、それでけんびきょうもできたし、ぼうえんきょうもできたことを話してくれました。
とつレンズの発明によって、どれほど、人間の知識を高め



てくれたかしれないこと、これによって、理科の学問がすばらしく進められたことなども、おもしろく話してくれました。



「もし、これが発明されていなかったら、おまえのすきなえい画も見られないだろうし、写真を写すこともできないだろう。だい一おじいさんは、新聞を読めなくなっておおよわりだよ。」

わたしは、いろいろな話を聞いて、

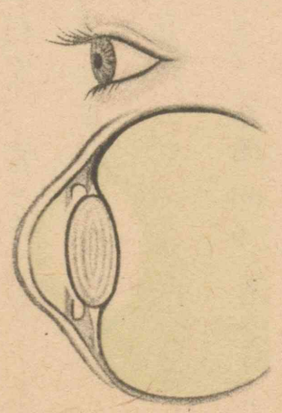
ふしぎに思ったり、おどろいたりしていると、おじいさんは、

「いや、それどころじゃない。よし子、おまえの目の中にも、レンズがはまっているんだよ。」

といいました。

わたしは、びっくりして、思わず、手でまぶたをこすりました。

「外からはわからないよ。目玉の中に、ちゃんとあるんだからね。」



「こんなガラスみたいなかたいものがあるの。」

「いや、やわらかいとつレンズだよ。それが遠い物を見る時と、近い物をみる時によって、ふくれかたがちがうように

なっているのさ。だから、本を見ていて、急に、遠いけしきを見ると、なんだかはじめはぼうっとするだろう。あれは、目玉のとつレンズが、度を合わせているからだよ。」

わたしはレンズのことにますます気がひかれてきました。

「こんど、雪がふってきたら、虫めがねで、雪を見てごらん。どんな形をしているか調べてごらん。そうだ。おじいさんの友だちで、大きなぼうえんきょうを持っている人がある。いっしょに行ってのぞかせてもらおう。天体のことを見たら、おまえは、またおもしろくなるだろう。」

おじいさんの話を聞いて、わたしはレンズのことをもっと調べてみようと思いました。

(三) まどのガラス

けさおきてみたら、まどガラスにきれいなもようが、たくさんついていました。

どのガラスのも、どのガラスのも、みなちがっていました。

白いくじゃくのはねをはりつけたように見えるガラスもありました。

氷山がいくつも、いくつもかさ

なって、流れてくるようなのもありました。

竹やぶが、いっぱいしげっているようなのもありました。すずめのお宿のような竹やぶです。いつか、絵本で見た「したきりすずめ」の竹やぶのようです。

きくの花や、コスモスの花が、いりまじってさ

いたようなのもあります。

星が、ぽちぽちとかがやいたようなのもあります。

一まい一まい見ていくと、それぞれに美しいものでした。

絵のてんらん会にでも行っているような気がします。

お昼ごろになって、外が

だんだんあたたかくなってくると、ぼんやりととけはじめ、いつのまにか、そのもようもきえていきました。

白いくじゃくのはねもなくなりました。

大きな氷山もどこかにいってしまいました。

したきりすずめのお宿も、きくの花も、星も見えなくなってしまい、ただのまどガラスになってしまいました。

あしたの朝はどんな絵がかかれているでしょう。

七　ことばのアクセント

（一）二十と二重

学芸会のプログラムを作る日でした。何か変った出しものはないかと、みんなで頭をひねっている時です。

いなかから転校してきた山野くんが、急にいなかなまりでいい出しました。

「ニジュウのとびらにしろよ。」

その調子が変だったので、西村くんは、

「え、二重の。」
と、きき返しました。委員長の水谷くんは、すぐ気がついて、
「二重じゃない二十だろう、山野くん。」
と、いったので、みなはどっとわらいました。
先生もわらいながら、
「これはおもしろい。二重と二十はどうちがうんだろう。かなで書けば、どちらもニジュウですね。」
みんなは二重と二十とを、いくどもいくども声を出していってみました。そのうちに西村くんが、
「わかりました先生。二重はジュウが高くなり、二十はニが高いのです。」

先生は、
「まあ、だいたいそうですね。」
とおっしゃいました。ぼくたちも、そうだと思いました。ところが、音楽のすきな本田くんは、いつまでもいつまでも、
「二重ノ」「二十ノ」と声を出していましたが、
「先生、ジュウの高さはどちらも同じです。ただニの高さがちがいます。二重の方は、ニがジュウよりも低く、二十の方は、ニがジュウよりも高いのです。」
といいました。
先生は、
「よく気がつきました。きみはジュウにノをつけていってい

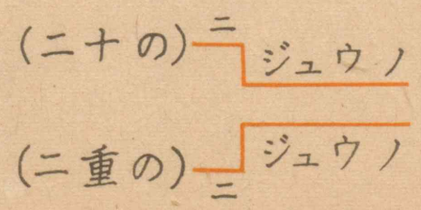
たから、ジュウの高さが同じだとわかったのでしょう。つまり、図にかくとこうです。」

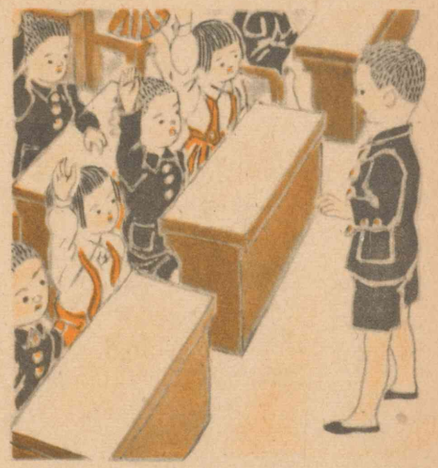
といって、先生は下のように書いてくださいました。そして、これがことばのアクセントというものだとおっしゃいました。

みんなは、おもしろくなって、「二重のとびら」「二十のとびら」とつづけて、やかましくさけびました。

その時、先生は、

「学芸会には、みんなが研究したものを出すといいね。きょうのアクセントの研究をまとめて、出しものにしたらどう





だろう。」

とおっしゃいました。みんなが、

「賛成、賛成。」

といいました。

そこで委員長の水谷くんが、みんなにそうだんしました。

「かなで書くと同じことばで、読むとアクセントのちがうものを、ひとりで三つ以上考えることにしようじゃないか。」

みんなは、

「それがいい、それがいい。」

といいました。

これは、あさっての集まりまでの宿題にして、ほかのプログラムにうつりました。

（二）ことば集め

ぼくは、うちへ帰って、アイウエオの順に、ぼくの知っていることばを思いだしてみました。そして、ノート・ブックに、二つずつならべて書きました。

ぼくは高い方の字の横へ、線を引くことにしました。読む時は線のある所を、わざと高く、太きく声を出してみるのです。そうすると、二つのことばのちがいがよくわかります。

アサ（朝）
アサ（あさ糸）
アシ（草の名）
アシ（足）
オヤ（さけび）
オヤ（親）
クリ（九里）
クリ（くり）
コブ（こんぶ）
コブ（からだにできるもの）

タビ（足にはくもの）
タビ（旅行）
ツユ（おつゆ）
ツユ（六月ころの雨）
ツバキ（木の名）
ツバキ（つば）
ニホン（二本）
ニホン（日本）
ハシ（ごはんのはし）
ハシ（橋）

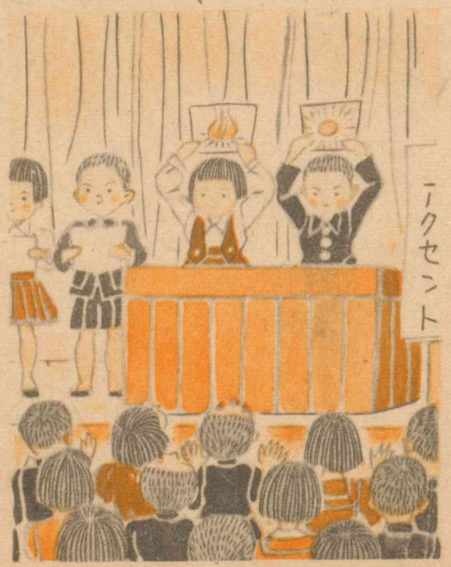
ぼくは、何十というほどたくさん書きあげた中から、右の

十組を紙に書きぬきました。そして第二回の委員会へ出しました。そこでみんなのを合わせて、読みよい文章に作りました。

（三）学芸会で

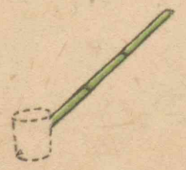
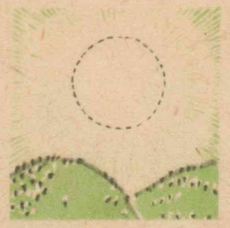
学芸会では、十人がえらばれて出ました。ABふたりずつ組んで、一番、二番、三番、四番、五番ときめました。

ぼくは橋本くんと組んで第五番です。五人の者は、それぞれのことばを絵にあわらした紙を持っています。そして自分



のいうとき、その絵をさしあげて、みんなに見せるのです。

	A	B
一番	エガ	エガ
	アリマス	アリマスカ
二番	ナヲ	ナヲ
	ツケタ	ツケタ
三番	ヒニ	ヒニ
	ヤケル	ヤケル
四番	ハガ	ハガ
	イタムヨ	イタムヨ
五番	キニ	キニ
	カケルナ	カケルナ

ここでまた、二度めがまわってきます。こんどは二字のことばで始まります。

	A	B
一番	アキガ	アキガ
	キマシタネ	キマシタヨ
二番	アサ	アサ
	デスカ	デスヨ
三番	コブハ	コブハ
	イカガ	イヤデスネ
四番	カマヲ	カマヲ
	カイマシタカ	カイマシタヨ

五番

A	B
キル	キル
モノガ	モノガ
ナイッテ	ナインダ

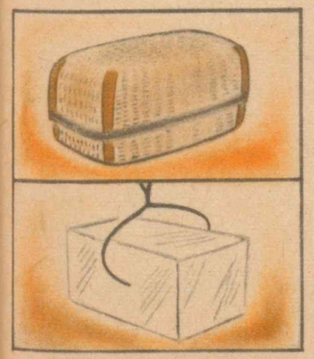
三回めは、二字で始まることばです。この時は、A五人とB五人とが、右と左に分かれて集まりました。そして五人ずつ声をそろえて、同じもんくをいうので、にぎやかでした。

一番

A	B
コオリヲ	コオリヲ
カウ	カウ

二番

A	B
シメルト	シメルト
コマリマス	コマリマス



三番

A	B
ツバキ	ツバキ
デショウ	デショウ

四番

A	B
ニジュウニ	ニジュウニ
ナリマス	ナリマス

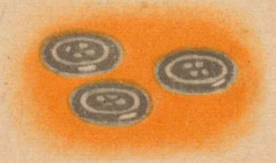
五番

A	B
ボタンノ	ボタンノ
ヨウ	ヨウ
デス	デス

全部をいい終った時には、会場がわれるようなはくしゅでした。

「山野くんのいなかなまりから、とんだ大成功になったね。」

と、あとで先生がほめてくださいました。



20 二重

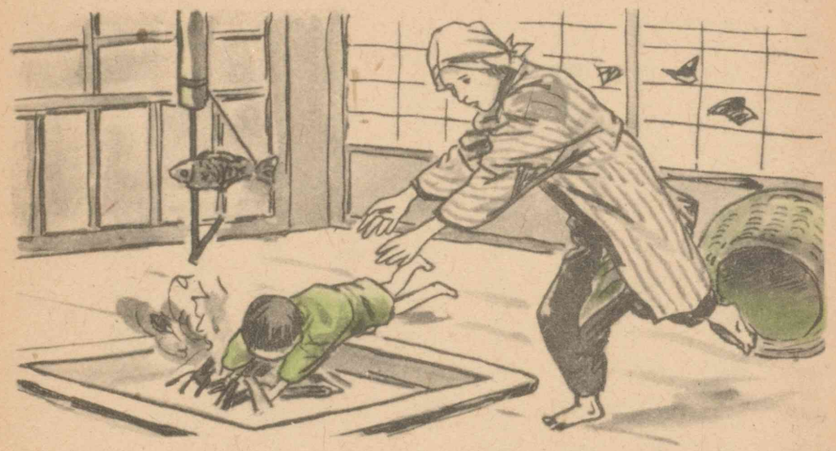
八野口英世

（一）大やけど

火のつくようなはげしいなき声に、どきっとしたおかあさんは、庭さきから家の中へかけこみました。

見ると、さっきまで、すやすやねむっていた清作が、もえあがっているいろりの中に落ちこんで、両手を火の中につっこんだまま、もえるにまかせて、苦しんでいるではありませんか。

「大変だ、大変だ、清作が――」。



とさけびながら、おかあさんは、いろりの中からすばやく引き出して、かかえあげました。

かわいそうに、ようやく三つになった清作のやわらかい手は、すっかり焼けただれて、見るのもおそろしいくらいです。

おかあさんの声におどろいて、おとうさんも、おばあさんも、いろりばたにかけつけました。

はげしいやけどに、清作は、もう

なく声さえ出ません。

「おかあさんが悪かった。――おかあさんの不注意が、こんなことになってしまった。」

といいながら、おかあさんは、なんとしてもこの手をなおしてやらなければならないと、一心に神さまにおいのりをするのでした。

医者にかけようとしても、村には医者もありません。町まで行けばあるのですが、村いちばんの貧しいくらしで、医者にみてもらうことさえできないのです。

しかし、おかあさんは、自分の一心で、きっとなおしてみせるとかたく決心して、その日からは夜もねないで、清作をかかえたままかん病をつづけました。

このおかあさんの熱心なかん病で、ひどいやけども、三十何日かの後には、ようやくなおりました。

しかし、左手の五本の指はすっかり焼けただれて、ちょうどまつの木のこぶのように固まってしまい、生まれもつかない、みにくいかたわになってしまいました。

おかあさんは、その手を見るにつけても、

「なんて、かわいそうなことだろう。この子が大きくなって、この手を見たら、どんなに私をうらむことだろう。ほんとうにすまないことだ。でも、こんなに貧ぼうでなかったなら、町の医者にもかけて、もう少しなんとかなっただろうに。」

と、何かにつけてなげくのでした。

（二）てんぼう

かたわの清作も、だんだん大きくなって、六つ七つのころになると、近所の友だちと、一日中遊びまわるようになりました。

「清ちゃん、お寺の庭へせみ取りに行こうよ。うんと鳴いているよ。」

といって、友だちが、いつもさそいにやってきます。清作は喜んで、みんなとつれだって出かけます。

「見つけた。あのさくらの木だよ。」

といいながら、ひとりがそっと近づくと、

「ジジイッ。」

と、せみはにげてしまいます。

にげたせみを追いかけながら、林の中をあちらこちらさがしまわっているうちに、みんな、わかれわかれになってしまいました。

しばらくすると、

「清ちゃん――、どこにいるの。」

「こっちだよう。」

と、よびあいながら、お寺の庭に出てきました。見ると、清作は、いつのまにかなんびきもつかまえて、ふところの中に入れています。

一ぴきもとれない友だちは、

「あ、清ちゃん、どこでそんなにつかまえたんだい。ぼくにくれよう。」

「ぼくにもくれよう。」

と、清作のふところのせみを、つかみとろうとします。

「あげるから、待ってよ。」

といいながら、清作は、ジイ、ジイと鳴くせみをつぎつぎと出して、みんなに分けてやりました。

清作は何をしても、どこかちがっていました。すもうをとっても、かけっこをしても、ねっ木遊びをしても　なかまのものより、ずっとすぐれていました。

ところが、らんぼうな友だちは、負けるとくやしまぎれに、きっと、悪口をいうのです。

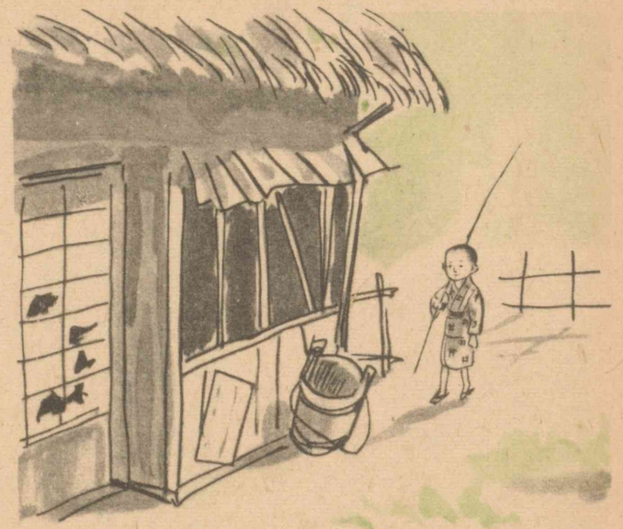
「てんぼう、てんぼう。」

「てんぼうの清作。」

なるほど、清作の焼けただれた左の手はぼうのような手です。子どもたちは、何をやっても清作にかなわないので、こういっていつもからかうのでした。

清作は、もの心つくようになると、てんぼうといわれるたびに、

「なるほど、てんぼうなんだなあ。——だけど、ぼくには、どうしようもないんだ。」



と、心をいためるのでした。

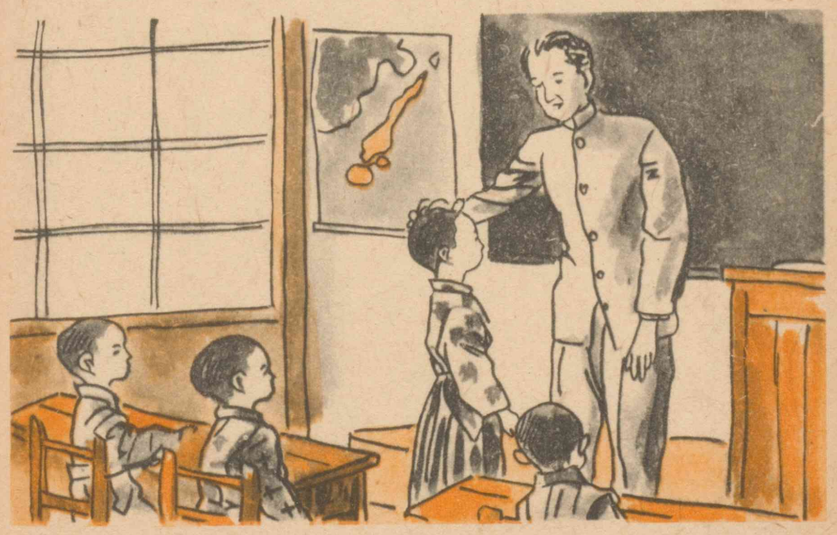
遊びから帰っても、家は村いちばんのあばら家です。かべも破れ、戸もこわれ、ゆか板さえもくさり落ちて、すりきれたむしろが二三まいしいてあるみすぼらしい家です。

そのあばら家で、くらしにこまる中にも、おかあさんに買ってもらった、古い絵本をくりかえして見るのが、清作にとっては何よりの楽しみでした。

（三）働く少年

明治十六年四月、八つになった清作は、いよいよ喜び勇んで、村の小学校に入学しました。

学校にはいってからの清作の勉強は、めきめき上達して、先生をおどろかすほどでした。上級に進むにつれて、全校のもはん生といわれるようになりました。こうなると、もう、だれも



てんぼうの清作などというものはありませんでした。

おかあさんも、清作の熱心な勉強ぶりと、りっぱな成績を見るにつけ、自分の苦しみなどわすれて、働き続けました。

そのころ、おとうさんは、村でゆうびん配達をしていましたが、日ごろから酒が好きで、ひまさえあれば、酒ばかりのんで、家のことなどは少しもふりかえりませんでした。そのため、おかあさんの苦しみは大変なものでした。田や畑の仕事から、くわを植えてかいこをかうこと

まで、ひとりできりもりしなければなりませんでした。

そればかりではありません。おかあさんは、そのころ、近所の人々の用事を引受けて、村から町まで十何里かの道を、荷物を運んだり、お使いなどしてわずかのお金をもらっていたのでした。

清作は、このおかあさんを少しでも助けようと考えて、学校の休みの日など、畑の草取りをしたり、馬のかいばを集めるなど、いっしょうけんめい働きました。

時には、湖でどじょうやうなぎをとって、村中を売り歩き、貧しい家のためにつくしました。

このことがいつとはなしに、村の人々に知れて、村いちばんの孝行者という評判が高くなり、家々では、

「野口の清さんをお手本にしなさい。」

といって、子どもたちをいましめるほどでした。

（四）先生のなさけ

そのころの小学校は四年で卒業です。卒業の試験には郡役所から試験官がそれぞれの学校に出かけて、卒業試験をすることになっていました。

清作が卒業するという年の試験官には、郡内のいなわしろ小学校の小林先生でした。

小林先生は試験のかんとくをしながら、教室をまわっている時、ふと左手の焼け固まった見るからにみじめな子どもを見つけました。

「なんて、かわいそうな子どもだろう。親の不注意か、それとも、何か思いがけないさいなんのためか。」

と、小林先生は、思わず、暗い気持になりました。

先生は、試験の終ったあとで、答案を一まい一まい調べられました。と、その中に、書きぶりといい、できばえといい、すばらしい子どものあるのを見つけました。

校長先生や受持の先生とお話してみると、それが、あの、

みるもあわれな手の持主の答案であったのです。

しかも、子どもの家は、その日その日の生活にもこまるほどおちぶれて、この上学校などに進ませることは、とてもできないということを聞いて、いっそうあわれをもよおすのでした。

小林先生は、さっそく清作をよんで、

「野口くん、きみはもっと勉強したいとは思わないかね。」

「勉強はいくらでもしたいのですが、家が貧ぼうで、上の学校に進むことができません。」

「するときみは、この学校を卒業してから、どうするのかね。」

「はい、おかあさんを助けてひゃくしょうをします。そして、ひまをみつけて、英語を勉強しようと思います。」

この答を聞いた小林先生は、かたく決心しました。

「この子どもを、このままうずもらしてはならない。なんとしても、勉強のできる方法をたててやらなければ——。」

先生は、さっそく清作のおかあさんに会って、費用は自分がいっさい心配するから、さらに高等科にあげるようにと、熱心にすすめました。

おかあさんは、先生にお願いするのは、申しわけないと思いましたが、清作ののぞみをかなえてやるのは、ねがってもないことなので、喜んでいっさいを小林先生におまかせしました。

（五）志を立てて

小林先生に見いだされた清作は、村から二里もはなれた、いなわしろの高等小学校に通うことになって、毎日四里の道を行き帰りするようになりました。雨の日も風の日も、時には、一メートルあまりも雪の積もった中を、泳ぐようにして通いました。

高等小学校三年のころには、熱心な清作に、学校の勉強のほか、課外に英語の勉強を始めました。

小林先生は、その熱心さと、すぐれた頭のするどさとを知れば知るほど、なんとかして不自由な手をすくってやりたい

ものだと、いろいろ考えました。

そのころ、わかまつという町に、わたなべという名高い医者がありました。小林先生は、清作の手の手術を、この医者にお願いしました。清作の喜びはどんなであったでしょう。

ある日曜日、清作は、わたなべ病院の門をくぐりました。

わたなべ先生は、清作の左の手をしんさつして、

「焼けただれて、固まってはいるが、ほねにさわりはないから、手術したら自由に動くだろう。」

といわれました。清作はむねをどきどきさせて、

「先生、この指が動くようになりますか。」

「むろん、動くようになる。しかし、手術のあとは残るかもしれない。」

清作はゆめかとばかりに喜びました。

その後、清作は、夏休みを利用し、わたなべ先生のもとに入院して、手術を受けました。三週間ばかりたつと、長い間のてんぼうの手は、みごとに切り開かれました。

清作の喜びは天にものぼるほどでした。

「よし。自分のように不自由な者は、この世の中にどのくらいいるかしれない。こうした人々をすくうために、自分は医学の研究をしよう。一生を世のため、人のためにつくすことは、男子のこの上もない名よではないか。」

少年清作はかたく決心して、高等小学校を卒業すると、まず、わたなべ病院の書生になりました。

それからの清作のふんとうぶりには、まことに血の出るようなものがありました。

後にはアメリカにまでわたり、さまざまな研究をなしとげて、世界の医学につくした野口英世こそ、あの、あばら家に生まれた、てんぼうの清作であったのです。

学習の手引

一　秋の日

(一)　いねこき

1「秋の日」の中の(一)と(二)は詩です。あんしょうできるくらい、たびたび読みましょう。

2　いねこきの詩を、きれいにノートに、うつしてください。いちばんすきなところにまるをいれましょう。

3　みなさんは、どんな手伝をしますか。その手伝を、このように詩に書きましょう。

(二)　製材所

1　製材所のようすが、どんなところによくあらわれていますか。ノートに書きだして読んでみましょう。

2　このようにはたらいている人々のようすをよくみて、それを詩に書いてみましょう。そのほか、秋のけしきや、生活の中から、たくさん詩をみつけて書いてください。

(三)　コオロギ

1　コオロギの文をよく読みましょう。

2　コオロギをつかまえて、しらべているのはだれとだれですか。

3　ミツカドコオロギは、どんなコオロギですか。

4　コロコロ、コロコロといって鳴くのは、なんというコオロギですか。

5　おすとめすは、なんで見分けますか。また鳴くのは、どちらですか。

6　たまごは、どこに生みつけますか。

7　みなさんも、コオロギや、そのほかの秋の虫について、よくしらべて、その記ろくを作りましょう。

二　赤いはね

(一)　愛の心

1　この文をよく読んで、つぎの問題について書いてみましょう。

○　共同ぼ金は、なんのためにするのですか。

○　共同ぼ金で集まった金は、どんなことに使うのですか。

○　共同ぼ金に赤いはねを使うのは、なぜでしょう。

○　お金をきふした、あきらさんときよ子さんは、どんな気持になったでしょう。

2　つぎの、「運動」ということばのつかいかたには、どんなちがいがありますか。

○　国民たすけあい運動。

○　運動でからだをきたえる。

3　人から親切にされたり、人のためにつくしたりしたことを、作文にしてみましょう。

(二)　赤いはね

1　この「げき」の文は、(一)の文と、どんなところにつながりがありますか。しらべてみましょう。

2　げきに出てくる人の中で、中心になるのはだれとだれですか。また、このげきは、どんなめあてで作られたものだと思いますか。

3　「たかしくん」の気持は、はじめのほうと、おわりのほうとでは、どのように変っていますか。また、それはなぜでしょう。

4　つぎのこどがらに気をつけて、友だちとこのげきをじっさいにしてみましょう。

○　やくわりのきめかた。

○　どんなものを用意したらよいか。

○　お話のことばを、どんなふうにいいあらわすか。

○　ことばと、からだの動かしかたを、どのようにくふうしたらよいか。

三　むかしの人の生活

1　どろ遺せきてんらん会にいったつもりで文全体がよく読めるように練習しましょう

(イ)　(一)の「てんらん会へ」には、どんなことが書いてありますか。

(ロ)　(二)の「むかしの家」を読んで、どんなことがわかりますか。

(ハ)　(三)の「いろいろの木器」では、どんなものが、めずらしいと思いますか。

2　(二)の「むかしの家」をしらべて、つぎの問題に答えなさい。

(イ)　どろの家はどんなふうに作られていますか。文やさし絵を見て、説明しなさい。

(ロ)　どろの人々は、どうして火だねを作りましたか。みなさんも、どろの人になったつもりで、もみきり発火をじっけんしてみましょう。

3　(三)の「いろいろの木器」を読んで、つぎのことをしらべましょう。

(イ)　どろの人々は、いろいろな道具をなんで作っていましたか。これについて、みなさんは、どんなことを感じますか。

(ロ)　よし子さんが、「私たちの家でおいわい

のとき、こわめしをたいたり、おもちをついたりずるのは、大むかしの人たちのならわしがそのままのこっているのではないかしら。」と、いっていますが、みなさんは、どう思いますか。

（ハ）みなさんの町や村に、むかしから伝わっている道具をしらべて、文や絵にかいてみましょう。

4　つぎのことばのわけを書きなさい。

(1)そそりたっている　(2)入場けん　(3)もけい　(4)参考にする　(5)ちんれつばこ　(6)キャンプ生活　(7)発火具　(8)説明書き　(9)食器　(10)まる木船　(11)農家　(12)木目

5　つぎのかん字によみがなをつけなさい。

(1)公園　(2)博物館　(3)土台板　(4)質問　(5)家族　(6)木器　(7)台所　(8)仕事　(9)利用　(10)材料　(11)生活

6　つぎのことばを使って文を作りなさい。

（イ）しばらく行くと

（ロ）ふと見ると

（ハ）たぶん

（ニ）思いうかべながら

四　話を買う話

1　このむかし話は、読む人にどんなことを教えていますか。思ったことを書いたり、話しあったりしてみましょう。

2　正太がはじめに考えていた「話」と、店で売っていた「話」とでは、どんなところがちがっていましたか。

3　正太の買って帰った「話」というのは、つまり、どんなことばだったのですか。このようなことばをたくさん集めてみましょう。

4　このようなむかし話を読んだり、それをもとにして、お話や紙しばいをしましょう。

五　動物の冬ごもり

1　冬ごもりする動物の中で、あきらさんのいちばんおもしろく思ったのは、なんでしょうか。

2　ヤマネの話は、だれがしてくれましたか。

3　ヤマネについてつぎのことを調べてください。

○　どこにすんでいますか。

○　はじめてつかまった時のようす。

○　どんなかたちの動物ですか。

○　昼間はどうしていますか。

○　なにを食べますか。

○　冬ごもりのようす。

○　なぜマリネズミとか、コオリネズミというのでしょうか。

4　ヤマネのちえについて、みなさんは、どんなことを感じましたか。

5　みなさんも、冬ごもりする動物についていろいろなことを調べてみてください。

6　つぎのことばをつかって、みじかい文を書きましょう。

○　軽快。代表的。とくに。冬ごもり。

六　冬の生活

（一）雪のうち

1　冬の生活という題で、三つの文がのせてあります。どの文も、すらすらとじょうずに読めるように、けいこしてください。

2　はじめに雪のうちの文を調べましょう。雪のうちは、どんなにして作りましたか。そのじゅんじょをノートに書きなさい。

3　雪のうちの中で、どんな話をしましたか。
それを発表してください。

4　雪がふると、みなさんはどんなことをしますか。じぶんのしたことを、このように作文にしましょう。

（二）虫めがね

1　この虫めがねは、なににつかったのでしょうか。

2　お日さまの子どもというのは、なんのことでしょう。説明してください。

3　とつレンズはどんな役にたちますか。

4　レンズの話で、よし子さんのいちばんびっくりしたことはなんでしょうか。

5　みなさんも、レンズをつかって、雪や、そのほかのいろいろなものを、調べてみてください。

（三）まどのガラス

1　朝、まどのガラスにどんなもようができていましたか。それをノートに書きだしてください。

2　このようなもようが、まどのガラスについていたのを、みなさんもたびたび見たでしょう。あしたの朝の絵をみなさんもよくみて、それについて話してください。

七　ことばのアクセント

1　ことばのアクセントの文をよく読めるように練習しましょう。

2　（一）の「二十と二重」の文をよく読んで、つぎの問題に答えなさい。

（イ）山野くんが「ニジュウのとびらにしろよ。」といったとき、西村くんが「え、二重の。」と問い返えしたのはなぜでしょう。

（ロ）本田くんは、「ジュウの高さはどちらも同じです。ただニの高さがちがいます。」といいましたが、それはどうしてわかったのですか。

3　みなさんは、つぎのことばをどういっていますか。アクセントをしらべてみましょう。

アメ（雨）　アメ（たべるあめ）
ウム（生む）　ウム（おできがうむ）
オク（置く）　オク（おくの方）
キリ（きり雨）　キリ（道具）
イカ（以下）　イカ（いか）
エキ（駅）　エキ（えきしゃ）
カキ（かきの木）　カキ（貝）
クム（水をくむ）　クム（組む）

4　みなさんのふだん使っていることばや、友だちの使っていることばをかなで書きあらわして、ゆっくりいってみましょう。

5　みなさんも、水谷くんたちのように、アクセントのちがうことばを集めて、発表会をひらきましょう。

6　つぎのかん字によみがなをつけなさい。
(1)学芸会　(2)頭　(3)調子　(4)委員長　(5)低い　(6)賛成　(7)線　(8)文章　(9)全部　(10)会場

八　野口英世

1　野口英世のお話がよくわかるように、文の読みを練習しましょう。

2　清作が大やけどをしたことについて、おかあさんはどんなに心配しましたか。それをお話してごらんなさい。

3　（三）の「働く少年」を読んでつぎのことに答えなさい。

(イ) 小学校に入学してからの清作のようすはどんなでしたか。

(ロ) 「野口の清さんをお手本にしなさい。」と、人々が子どもたちをいましめたとありますが、どんな所がお手本だと思いますか。

4 (四)の「先生のなさけ」を読んで、つぎの問題に答えなさい。

(イ) 「小林先生は、思わず、暗い気持になりました。」とありますがそれはどうしてですか

(ロ) 清作の勉強したい心持を知った小林先生は、どうしようとかたく決心しましたか。

(ハ) みなさんは、この小林先生について、どんなことを感じますか。

5 (五)の「志を立てて」を読んで、つぎのことに答えなさい。

(イ) 清作の熱心さと頭のするどさを知った小林先生は、どうしてやろうと考えましたか。

(ロ) わたなべ先生の手術で、不自由な手がみごとに切り開かれた時、清作はどう決心しましたか。

6 野口英世の文をよく調べて、このお話をげきや紙しばいにつくってみましょう。

7 つぎの問題を練習しなさい。

(イ) つぎのかん字にかなをつけなさい。

(1)不注意 (2)医者 (3)貧しい (4)破れる (5)成績 (6)評判 (7)費用 (8)課外 (9)手術 (10)病院 (11)不自由 (12)研究

(ロ) つぎのことばのわけを書きなさい。

(1)すばやく (2)もの心がつく (3)あばら家 (4)評判になる (5)答案 (6)のぞみをかなえてやる (7)利用する (8)ふんとうぶり

新しく出たおもなことば

愛	14	一部分	45
あくる朝	69	一家族	50
アクセント	109	いったい	50
あばら家	131	一ぷくし(て)	70
あやしい	71	一点に	99
あらたまった	62	いっさい	140
表わす	17	いなかなまり	109
委員長	110	いねこき機械	5
医学	144	いねたば	4
イギリス	19	命拾い	68
以上も	80	いましめる	135
いそが(ば)	62	いりまじっ(て)	106
いためる	131	色づい(て)	40
一面に	59	うずもらし(て)	139

打ちかため(て)	45		
うなずき(ました)	76		
うろ	79		
エスキモー	29		
エンマコオロギ	9		
おおよわり	102		
おちぶれ(て)	138		
おまけに	69		
思いがけなく	18		
思いうかべ(ながら)	59		
カード	19		
かいば	134		
会場	42		
外地	31		

課外 141
書きぶり 137
学生 21
学芸会 109
学者 76
かげんし（たり） 46
かしげ（て） 19
かすかに 8
花だん 8
かたロ 55
かんとく 136
気軽く 19
きこり 82
北アメリカ 93
きっぷ売場 41
きふし（た） 15

キャンプ生活 47
客引き 17
共同ぼ金 15
きりもり 134
くいこむ 45
ぐいと 4
草ぶき 46
くさり落ち（て） 131
ロ々に 30
組合わせ（て） 55
くやしまぎれに 130
グループ 15
郡役所 136
計画 18
軽快 79
けだかい 20

けた 46
けんびきょう 101
コウモリ 80
公園 40
孝行者 135
国民 16
心から 74
こごえ（て） 82
こしき 52
こもって 36
こわめし 53
コンクリート 45
こん虫 79
さいなん 61
材料 58
さく 45

さしあげ（て） 118
さなぎ 75
さわり 142
産らん管 12
参考 44
三倍分 65
産する 80
残念（て） 87
仕あげ 90
思案し（て） 68
しかけ 48
試験官 136
手術 142
しずおか県 41
質 58
地ひびき 6

じぶん 60
しめり気 46
シャベル 89
食物 52
食器 54
書生 144
上達し（て） 132
白ペンキぬり 94
信用し（て） 72
しんさつし（て） 142
図 112
水害みまい 18
すえに 60
すき 57
すくう 19
すぐれ（て） 129

すごし（て） 75
進められ（た） 102
すそ 73
ストップ 5
すのこ 52
スプーン 55
すませ（ました） 12
すみきっ（た） 39
すりきれ（た） 131
するどさ 141
成功し（ない） 84
整理 17
西洋 83
世界的 78
説明 44
全校 132

そうそう 83
そそりたつ（て） 40
ぞっとし（て） 67
それぞれに 107
大木 79
代表的 80
体温 81
ダイヤモンド製 94
たかつき 55
たぐりあげ 86
田げた 56
出しもの 109
たすけあい運動 16
たて物 40
田船 55
たる木 46

短気 65
力こぶ 7
知識 101
地中 81
中国 20
中心 50
直けい 45
長方形 55
調子 109
ちんれつ（された） 42
チンパンジー 83
つくし（ました） 135
つまれ（た） 5
つまり 81
つみごえ 8
つれだっ（て） 127

電気代 19
テント 47
てんじょう伝いに 86
天体 104
てんぼう 126
度 104
東北地方 78
冬みん 80
答案 137
土器 52
土台板 43
どっかりと 5
とつレンズ 101
ととのえ（たり） 41
とびうつっ（たり） 79
ともに 83

とろ遺せき 41
なかばころ 80
なぐさめ（て） 39
なげく 126
なさけ 136
なしとげ（て） 144
ならわし 54
ナンキンネズミ 78
二重 109
にたきする 52
入場けん 41
入院 143
庭さき 122
ねがっ（て） 140
ねっき遊び 129
ノート・ブック 114

農家 57
のこくず 7
はくしゅ 121
博物館 40
はげいとう 8
はたおり道具 59
はち 55
発達 19
発火具 49
発見し（た） 46
発明 101
バナナ 80
はらがけ 7
はり 46
番頭 71
ひきわられ（た） 7

引きあげ（て） 31
ひきくらべ（て） 42
引受け（て） 134
日ごろ 133
火だね 48
氷山 105
費用 140
広口びん 9
不幸な 18
不自由な 141
ふせぐ 45
不注意 124
冬ごし 75
冬ごもり 75
ふんばつし（て） 64
文章 117

ふんどうぶり 144
へいこうし（ました） 69
方法 49
ほロ 49
ほね組 46
ほりくぼめ（た） 47
まかせ（て） 122
まぐわ 57
町はずれ 69
待ちかね（て） 70
マリネズミ 81
まる屋根 46
見いだされ（た） 141
身軽に 79
みじめな 136
ミツカドコオロギ 9

みなしご 16
身なり 41
都 60
身より 16
見るからに 130
見分け 12
むさ（れる） 52
名よ 20
めきめき 132
モーター 6
目的 16
木目 58
木器 51
もの心 130
もはん生 132
もみ 4

もみきり発火 49
もよおす 138
焼けただれ（て） 123
養っ（て） 31
ヤマネ 77
山小屋 79
ゆか 43
養老院 38
夜通し 87
喜び勇ん（で） 132
リバプール 19
両親 50
利用し（て） 58
れい度 82
ろ 47
わらたば 5

新しく出たかん字

機（4）　置き（11）　民（16）　勇（20）　養って（31）　県（42）
械（4）　管（12）　的（16）　洋（22）　円（32）　以（42）
製（6）　続けて（13）　角（17）　服（22）　老（38）　参（44）
材（6）　球（14）　整（17）　向（23）　院（38）　直（45）
太い（6）　歩いて（14）　理（17）　拾った（26）　園（40）　打ち（45）
短い（10）　愛（15）　不（18）　去（30）　博（40）　質（46）
暗い（11）　共（15）　首（19）　何（31）　遺（41）　焼いたり（49）

法 (49)　族 (50)　調べる (51)　祝い (53)　残って (54)　変り (55)　農 (57)

利 (58)　料 (58)　倍 (63)　損 (65)　命 (68)　宿 (68)　悪者 (71)

信 (72)　着 (74)　温 (81)　験 (83)　成 (84)　功 (84)　観 (85)

察 (85)　受取り (95)　点 (99)　識 (101)　科 (102)　真 (102)　委 (110)

低く (111)　賛 (113)　順 (114)　章 (117)　清 (112)　注 (124)　医 (124)

貧しい (124)　固まって (125)　寺 (127)　破れ (131)　古い (131)　治 (132)　績 (133)

酒 (133)　孝 (135)　評 (135)　判 (135)　試 (136)　郡 (136)　官 (136)

費 (140)　願い (140)　申し (140)　志 (141)　課 (141)　術 (142)　血 (144)

12 二葉 小国421

文を書いた人

四　話を買う話……宇野浩二
五　動物の冬ごもり……下泉重吉
六　(一)　雪のうち……石森延男
　　(二)　虫めがね……石森延男
七　(一)　二十と二重……大西雅雄
　　(二)　ことば集め……大西雅雄
　　(三)　学芸会……大西雅雄

このほかの文はへんしゅうぶとじどうのもの

絵をかいた人

岩井誠一　高橋庸男　谷口健雄
箱崎正秋　松井末雄　三芳悌吉
三輪孝　向井潤吉　山上喜司

国語の本　八（小学校第四学年後期用）

昭和二十五年三月一日印刷
昭和二十五年三月五日発行
（昭和二十　年　月　日文部省検定済）

定価　円　錢

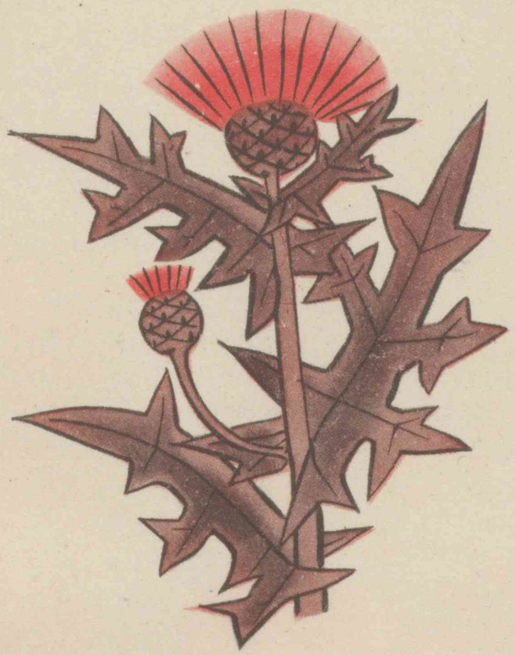
Approved by Ministry of Education
(Date Mar. 1, 1950)

著作者　西原慶一　泉節二　山下正雄　飛田多喜雄　小山玄夫　斎田喬

発行者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社　代表者　大野治輔

印刷者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社　代表者　大野治輔

発行所　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社



なまえ

広島大学図書
0130449934

二葉株式会社